

令和2年度スポーツ庁委託事業

Special プロジェクト2020 「特別支援学校等を活用した地域  
における障害者スポーツの拠点づくり事業」 成果報告書

令和3年 3月

国立大学法人 筑波大学

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、筑波大学が実施した Special プロジェクト 2020 「特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

## 目次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 巻頭言 1                         | 1  |
| 巻頭言 2                         | 2  |
| ＜実践報告＞                        |    |
| プロジェクトの概要                     |    |
| 1. 事業趣旨                       | 3  |
| 2. 事業の目的と内容                   | 3  |
| 3. 事業実施体制                     | 4  |
| ＜活動の記録＞                       |    |
| 2-1. 大塚ランニングサークル活動記録          | 7  |
| 2-2. 大塚卓球（テーブルテニス）クラブ活動記録     | 13 |
| 2-3. 大塚ドッジビークラブ活動記録           | 19 |
| ＜まとめ＞                         |    |
| 3-1. 本事業の効果について（アンケート結果より）    | 25 |
| 3-2. ボランティアマニュアル作成に向けたアンケート結果 | 37 |
| 3-3. 成果と課題                    | 39 |
| ＜巻末資料＞                        |    |
| 4-1. 本人・きょうだい・卒業生用事前アンケート     | 41 |
| 4-2. 本人・きょうだい・卒業生用事後アンケート     | 45 |
| 4-3. 保護者・ボランティア用事前アンケート       | 49 |
| 4-4. 保護者・ボランティア用事後アンケート       | 53 |
| 4-5. ドッジビーの基礎情報               | 59 |
| 4-6. 事業の概要スライド版（スポーツ庁報告会資料）   | 69 |



## 筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクトについて

筑波大学附属大塚特別支援学校は、幼稚部から高等部まで 74 名の幼児児童生徒が在籍している知的障害がある子供達の特別支援学校です。平成 27 年度から 30 年度までの 4 年間、文部科学省インクルーシブ教育システム構築モデル事業「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進」を受託し、全学部において、年間を通じた学校間交流に取り組んできました。交流の主な手段としては、アダプテッドスポーツ（参加者の実態に応じて、ルールや道具に工夫を加えたスポーツ）です。4 年間の取り組みを通じて、①身体活動をはじめとするノンバーバルコミュニケーションは障害の有無にかかわらず結果を実感・共有しやすいこと、②年間を通じた交流が障害や年齢、性別、職種などの枠を超えてお互いに敬意を持ち、楽しみあい、理解しあうことへ寄与するということが、③スポーツを通じて達成感を味わうことで自己理解が深まり意欲的に物事に取り組むことができるようになることなどの成果を明らかにすることができました。その成果は、在校生のみならず、保護者や、卒業生本人、卒業生の保護者にも実感を伴って理解されています。

今回の令和 2 年度「Special プロジェクト 2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」は、上記の取り組みをさらに継続・発展させたものになります。本事業を、筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト（Tsukuba Otsuka Challenge Sport Project（以下 TOCSP）と名付け、PTA と卒業生の保護者が中心となり組織する大塚ドッジビークラブ後援会と連携し、知的障害のある子供達がボランティアや指導者とともに継続してスポーツ・身体活動を楽しむことができる拠点を作ることを目的としました。具体的にウォーキング・ランニングと、ディスクドッジ、卓球の 3 種目を選定し、9 月から 2 月まで取り組んできました。参加者として登録した障害当事者、きょうだい、卒業生は 43 人です。保護者、ボランティアの登録人数は 47 名で、筑波大学附属高等学校、附属坂戸高等学校、附属駒場高等学校、私立郁文館高等学校の生徒のほか、複数の大学の学生もいました。障害のある人々が卒業後もスポーツに参加できる生活は、スポーツ以外の生活をさらに充実させ、メンタルヘルスの上でも重要であるといわれています。地域に障害者スポーツの拠点が存在することがますます重要になってきます。今年度、コロナ感染予防対策の点からも取り組みが十分でないところもありましたが、ぜひ、来年度も本事業に取り組みたいと考えています。

最後に本事業を推進するにあたって、スーパーバイズをいただいた帝京大学教育学部准教授 中村晋先生、日本ドッジビー協会（DBJA）理事の中村真博氏、筑波大学附属大塚特別支援学校 PTA、大塚ドッジビークラブ後援会、一般社団法人日本ドッジビー協会（DBJA）、るのスポーツ青木龍太さま、東洋大学女子卓球部、法政大学男子卓球部のご協力を得たことについて、心より御礼申し上げます。次年度もさらに充実した活動としていきたいと思っております。

筑波大学附属大塚特別支援学校  
学校長 川間 健之介

## 共に目指す共生社会の形成～みんなが主体、みんなが中心の活動へ～

2006年に国連が採択した「障害者権利条約」の制定過程では、障害のある当事者が「私たち抜きに私たちのことを決めないで “Nothing about us without us” 」という言葉に社会に対して主張し、起草交渉に関与しました。日本国内でも内閣府に設置された障害者政策委員会には障害のある有識者が参加しており、当事者抜きに国の基本計画を審議することはありません。個人の多様性を尊重し合う共生社会を形成するためには、私たち自身も障害のあるなしに関係なく、様々な立場にあるすべての人が主体となる対等な関係を作り、社会的・文化的な活動に参画することが大切ではないかと考えます。

筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト（Tsukuba Otsuka Challenge Sport Project）の活動は、筑波大学附属大塚特別支援学校に在籍する幼児児童生徒と教員、卒業生、保護者、多くのボランティアによって活動が運営されています。このことはまさに、「みんなで共生社会の形成を目指す活動」として意義あるものです。誰もが楽しめるスポーツと身体活動の拠点作りを目指す本事業では、地域の様々な人たちと出会い、そしてつながりができました。参加者一人一人の目的は「楽しむ」ことであったり、「支える」ことや「育てる」ことであったりします。さらにはみんなが目指す活動の先に、共に生きる社会の新しい形が見えています。それは、この活動に参加するすべての人が主体となって新しい文化を築き、地域に根ざした取り組みとして継承、発展させていくコミュニティの姿です。

今年度は新型コロナウイルス感染症対策下で、活動の休止や制約を余儀無くされました。しかし、こうした状況にありながらもオンライン教室などの工夫によって活動を止めることなく継続する努力がなされました。決して十分と言えないかもしれませんが、厳しい状況の中だからこそ、この取り組みの在り方や目指す方向性について考えることができたのではないのでしょうか。一方、「仲間に会いたい」、「みんなと体を動かしたい」、そうした参加者の願いは、コロナが終息した後に「こんなことにチャレンジしたい」という新しい目標へと変わり、余暇の過ごし方について考えるきっかけを与えていると思われまます。

今後、この取り組みを持続可能な活動として運営していくためには工夫も必要です。例えば、支援する側とされる側という関係ではなく、高等部の生徒や卒業生も運営に参加でき、立場の違いを作らない組織作りを目指すことも一つのアイデアかもしれません。彼ら自身が活動をよりよくするために何ができるかを考えたり、表明したりする機会を積極的に設け、主体的に参加しようとする姿勢を支えていくことも大切な視点です。本事業で取り組んだ、卓球、ドッジビー、ランニングの競技では、活動の共有を通して相互の理解が深まり、心のバリアがなくなることで新しい関係が生まれています。知的障害のある人とない人がチームメイトとして競技に参加するユニファイドスポーツへと発展させることができれば、相互理解と自己尊重を目指すスポーツの新しい価値を生み出せるのではないのでしょうか。

共生社会の形成は、私たちの身近なコミュニティの取り組みから始まります。誰かに頼り、誰かに期待するのではなく、まずは「参加してみたい」、「自分もやってみたい」、そう思える集いの場になることを期待しています。そして、みんなが主体、みんなが中心にいる活動を目指し、障害のある人もない人もすべての人が自分らしく生きることができインクルーシブ社会の形成を目指していきましょう。

帝京大学 中村 晋

# 實踐報告



## 1. 筑波大学大塚チャレンジスポーツプロジェクトの概要

### 1. 事業趣旨

知的障害のある子供達がボランティアや指導者とともに継続してスポーツ・身体活動を楽しむことができる拠点を作ることを目的とし、筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト（Tsukuba Otsuka Challenge Sport\* Project（以下 TOCSP）として展開する。ここでいう「拠点」とは、単なる「場所」としてではなく、「組織」や「継続して活動するためのシステムづくり」「人材育成」も含める。

\*学術的に「Sports」と複数形で記載する場合、競技スポーツを指すことが一般的である。一方で「Sport」と単数系で記載する場合、スポーツという言葉の本来的な意味である「気晴らし」「楽しみ」なども含む意となる。本事業では、幅広い意味でのスポーツ活動に取り組むことを目指すため、事業名として単数形を用いることとする。

### 2. 事業の目的と内容

#### 2-1. 事業の目的

①知的障害のある子供達がボランティアや指導者とともに継続してスポーツ・身体活動を楽しむことができる拠点を作る。

\*3年後にアダプトテッドスポーツや、ユニファイドスポーツの大会（発表会）を開催することを目的に組織作りを進めていく。

②学校体育や日頃の余暇で取り組んでいる馴染みが深く、親しみやすい活動内容に取り組むことを通じて、生活の中にスポーツ活動を定着させ、余暇の満足度を高める。

③委員会や、指導の現場であがった、知的障害のある方々と共に楽しんだり、指導支援に当たったりする際の留意事項をまとめ、次年度の活動に向けた知的障害のある子供達へのスポーツ指導簡易マニュアル試作を試みる。

\*今年度の完成度は未定のため事業費を使用した印刷製本などは行わないこととする。

#### 2-2. 事業の内容

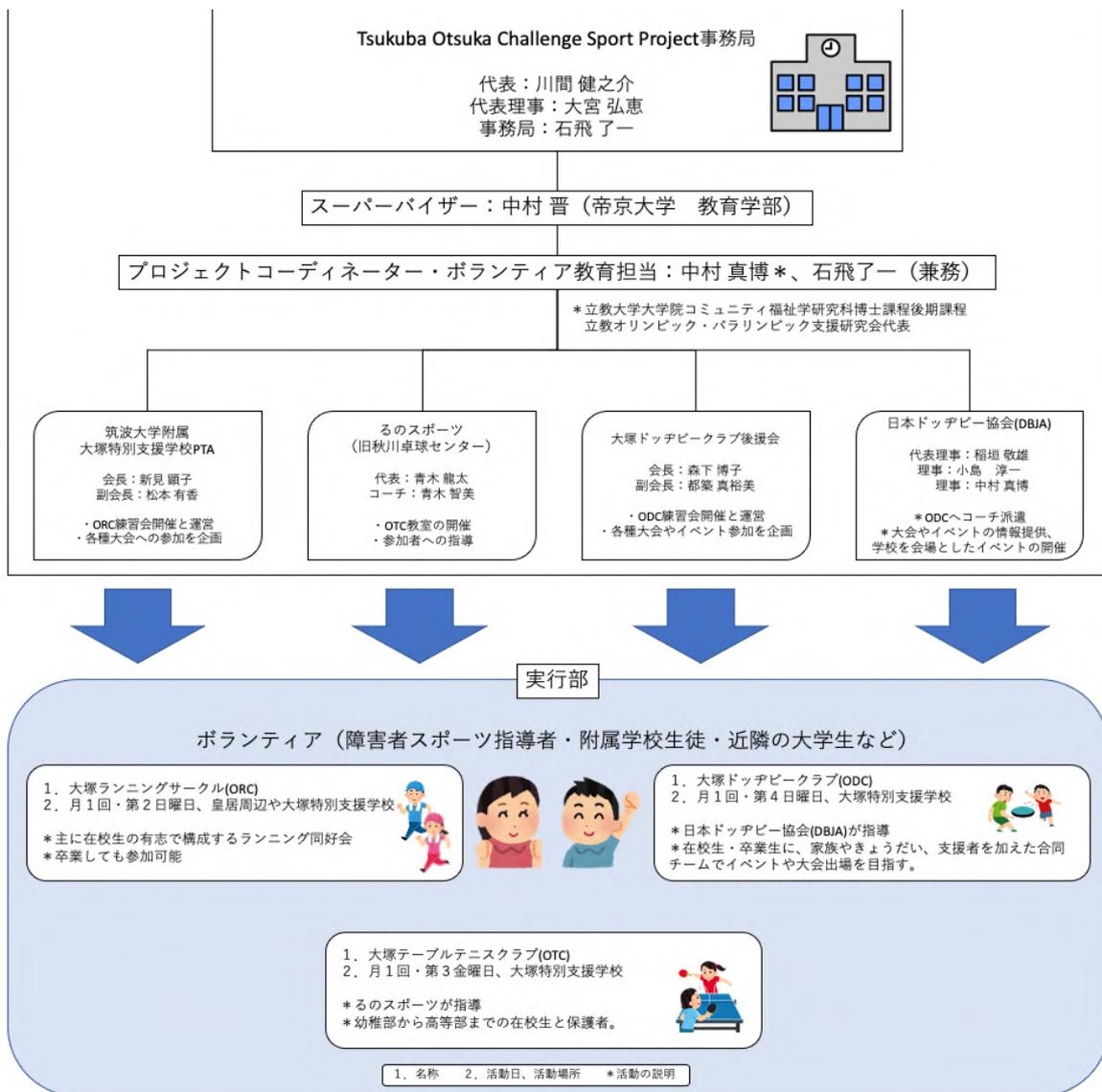
活動内容には、学校体育や日頃の余暇で取り組んでいる内容を取り扱うこととし、ウォーキング・ランニング、ディスクドッジ、卓球の3種目を選定することにした。

ウォーキング・ランニングは、知的障害特別支援学校の多くで取り組まれていること、場所・時間・道具の制限が少なく、比較的気軽に取り組むこと、継続して取り組むことで体力や健康の増進に大いに効果が期待できることが選定の理由である。

ディスクドッジは、ウレタン製の柔らかいフライングディスクを使ったドッジボールに似たスポーツである。こちらは簡単なルールのある集団スポーツであること、ソフトディスクを使用するため怪我が少ない一方で、短時間で運動量を確保できる種目であること（日本中の小学校で授業やレクリエーションの教材として取り入れられている。本校高等部でも体育の授業や、交流及び共同学習で取り組んでいる）、フライングディスクが全国障害者スポーツ大会の正式種目であるため発展的に取り組めることなどから選定した。

卓球は、オリンピック・パラリンピックの正式種目であることから知名度も高く、卓球バレー、ごろ卓球、卓球というように参加者の人数や運動能力・技術に応じてルールや道具を工夫しやすい色々な楽しみ方ができる競技であることから余暇の充実につながると考え選定した。

### 3. 事業実施体制



#### 【構成メンバーとその役割】

##### 1) 運営部 (実行委員会)

###### (1) 筑波大学附属大塚特別支援学校

・TOCSP事務局を置く。事業全体の実施計画や、予算案を作成、事務局を構成する筑波大学附属大塚特別支援学校PTA、大塚ドッジビークラブ後援会、日本ドッジビー協会(DBJA)、るのスポーツ、また、実行部であるボランティアとの連絡調整を担う。

・定期的に実行委員会を開催し、実行体制や活動内容の評価修正を行う。

### (2) スーパーバイザー

- ・定期的に組織運営、ボランティア教育に関する評価、助言を行う。帝京大学教育学部 中村晋准教授（元特別支援学校教諭、臨床発達心理士）が担う。

### (3) プロジェクトコーディネーター・ボランティア教育担当

- ・スーパーバイザーからの助言を受け、事業全体のコーディネートを行うと共に、実行部のボランティア教育を通じて将来の組織運営を中核的に担う人材育成に取り組む。

日本ドッジビー協会（DBJA）の理事でもある中村真博氏（立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科博士課程後期課程）と、事務局兼任の石飛一が行う。

### (4) 筑波大学附属大塚特別支援学校 PTA

- ・大塚特別支援学校とともに、TOCSP 事務局を構成する。本事業では、ORC の練習会や大会参加の調整や、在校生・卒業生と合同のイベントを開催する際、在校生への連絡窓口を担う。
- ・練習の成果発表の場として、新宿シティハーフマラソン、礪川マラソン大会、目白ロードレースなどの情報提供や参加取りまとめをする。また、ボランティアと共に当日の引率などを行う。

### (5) 大塚ドッジビークラブ後援会

- ・主に大塚特別支援学校の卒業生有志とその保護者が所属する組織である。月 1 回大塚特別支援学校の校舎を使い、ドッジビーを使った活動に取り組む。本事業では、大塚特別支援学校とともに、TOCSP 事務局を構成する。本事業における役割としては、日本ドッジビー協会（DBJA）と連携した ODC の練習会や大会参加の調整や、在校生・卒業生と合同のイベントを開催する際、連絡窓口を担う。
- ・練習の成果発表の場として、日本ドッジビー協会（DBJA）が主催する大会等の情報提供や参加取りまとめをする。また、在校生・卒業生の合同チームを編成し、ボランティアと共に大会参加・当日の引率などを行う。

### (6) 一般社団法人日本ドッジビー協会（DBJA）

- ・一般社団法人日本ドッジビー協会（DBJA）は、障がいのある人にとってもスポーツに親しみやすい環境を創出すべきであると考え、2016 年に障がい者プロジェクトを設置し、普及活動に取り組んでいる団体である。本校の生徒をはじめとする知的障害児や自閉症児を対象としたイベントも開催しており、障害のある子供達への指導経験が豊富なメンバーが理事を務めている。

その知見を生かし、ODC へ参加する在校生、卒業生、保護者への技術指導を行うとともに、障害の有無や年齢にかかわらず楽しむことができるドッジビーの指導方法をボランティアへ指導する。

- ・障害の有無や年齢にかかわらず楽しむことができるドッジビーを活用したイベント（在校生、卒業生、ボランティアや保護者、指導者が共に楽しむことができる内容）を開催し、活動の場を作る。
- ・ODC が大会に参加する場合、監督業務を行う。

### (7) るのスポーツ

- ・代表の青木龍太氏は、コーチの青木智美氏と共に初心者から楽しみ、実力をつけることができる卓球教室を主催。アドラー心理学に基づいた「心」をメインとした人間力、自立型人間育成に力を注ぎ、子どものやる気スイッチ、子ども達が先生のアウトプット練習法などを考案し、日々指導に取り組んでい

る。全国からも講演の依頼が絶えない指導法は、32年連続全国大会に所属選手が出場するなどの成果が見られる。その指導方法は、障害の有無にかかわらず効果を発揮しており、昨年度大塚特別支援学校PTAと連携して開催した卓球教室には、毎回20人を超える幼児児童生徒と保護者などが参加し好評を博した。この全国国立大学附属学校PTA連合会の土曜放課後助成金を活用した取り組みは、「オリパラ関連部門優秀賞」を受賞するなど外部からも高い評価を得ることができた。

・本事業においては、OTCへ参加する幼児児童生徒、保護者への技術指導を行うとともに、障害の有無や年齢にかかわらず楽しむことができる卓球の指導方法をボランティアへ指導する。2月には希望者を対象に、本拠地である、るのスポーツにて障害の有無や年齢、性別などにかかわらず共に楽しむことができる内容の卓球イベントを実施する。

※運営部は、月1回実行委員会を開催する。実行委員会では、①プロジェクトの運営に関する連絡調整、役割分担、クラブごとの活動報告、②スーパーバイザー、コーディネーターの助言を受け、取り組みの改善や見直し、③知的障害のある子供達へのスポーツ指導簡易マニュアルを試作することに向けた留意事項の聞き取りや収集、④年度末に発行する事業報告書の原稿作成を行う。

## R2年度 実行委員会実施日

①9月12日 (zoom)、②10月18日 (zoom)、③11月 (月間を通じたメール連絡)、④12月5日 (zoom)、⑤1月9日 (zoom、メール)、⑥2月20日 (zoom、メール)

## 2) 実行部

(1) 大塚ランニングサークル (ORC)、大塚ドッチビークラブ (ODC)、大塚卓球 (テーブルテニス) クラブ (OTC)

・幼児児童生徒、卒業生、活動に賛同する地域の方々が参加し、ともにスポーツ活動を楽しむためのクラブ組織

## (2) ボランティア

事業の経費を活用して作成したポスターを近隣の大学、また、筑波大学の附属学校群へ配布し、ボランティアを募る。

## 2-1 大塚ランニングサークル活動記録

ウォーキング・ランニングを、本プロジェクトの活動に選定した理由は以下の3つである。

- ・知的障害特別支援学校の多くで取り組まれている。
- ・特別な用具を必要とせず、自宅周辺などの身近な場所で、自身の体力に応じて時間を設定しながら、一人でも取り組めるなど、道具・場所・時間・人など運動を始めるにあたっての制限が少ない。
- ・継続して取り組むことで体力や健康の増進に大いに効果が期待できる。

今年度の大塚ランニングサークルには、本人・きょうだい・卒業生が24名、保護者・ボランティアが33名の登録があり、9月、10月、11月、12月に活動を実施した（1月は緊急事態宣言が発令されたため中止、2月は緊急事態宣言が延長中であったためオンライン教室の試行を目指したが、年度内の実施を断念した）。各月の参加者を以下に示す。

|           | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 |
|-----------|----|-----|-----|-----|----|----|
| 参加者       | 5  | 16  | 23  | 20  |    |    |
| ボラ<br>保護者 | 8  | 23  | 36  | 23  |    |    |

## 主な活動内容

## 【9月13日】

※母体となったランニングサークルも、新型コロナウイルス感染症予防の観点から活動を休止していた。久しぶりの活動となったため、新規に募集したメンバーは召集せず、旧メンバーのみで実施した。活動場所となる皇居周辺の他利用者の活動状況の把握をすると共に、人数が増えた場合の密を避けた運営方法を検討するためである。

○挨拶、出席確認、翌月からの活動の見通しの説明、ボランティアの紹介

○準備体操

○各自のペースでウォーキング・ランニング（5km）

○整理体操

○参加者の様子と次回の課題

- ・プレ活動であったが、参加者・ボランティア間のコミュニケーションは取れていた。
- ・お互いに挨拶を交わし、近況などを伝え合っていた。ゴールした時の充実した表情や仲間と一緒に活動できたことの喜びがたくさん見られた。
- ・準備体操、整理体操は生徒にリーダーを担ってもらいつつ、しっかりと怪我の予防、疲労回復ができる専門的な指導も行いたい（技術向上にも繋がるため）。
- ・人数が増えた際の間隔保持とコミュニケーションの両立をどのように図るかは課題。
- ・参加者の実態がわからないため、関わり方に困った様子をみせるボランティアがいた。
- ・活動終了者の待ち時間（人数が増えることにより、差が大きくなることが想定される）。

**【10月13日】**

○挨拶、10月のボランティア紹介

○準備体操

○個人練習（5km～10kmのウォーキング・ランニング）

○参加者の様子と次回の課題

- ・初回かつ校外での活動のため、親子での参加を依頼した。参加者の殆どが親子ペアでのランニング/ウォーキングをそれぞれのペースで行えた。
- ・初めて会うボランティアと一緒に走った生徒には多少の緊張が見られたが、一周を走り終える頃にはコミュニケーションが取れている様子が見えた。
- ・日頃あまり運動をしていない参加者も自分のペースで無理なく完走/完歩できた。ゴールした際の嬉しそうな表情が物語っていた。
- ・お互いに声を掛け合ったり、仲間の頑張る姿を見たりして、最後まで頑張れた人、いつも以上の力を出せた人がいた。
- ・ボランティアには学生が多い。初見で、かつ、参加者と二人だけで1周（5km）を走るのは、お互いに負担が大きい様子だった。慣れるまではグループ走を行うなど配慮が必要。
- ・それぞれの目標（または、記録）を聞き取り、参加者と伴走者のマッチングを整えるなどして、無理なく目標に向かっていける体制を整えたい。
- ・準備運動、整理体操（ストレッチなど）をしっかりと行う必要がある。

**【11月15日】**

○11月のボランティアの紹介

○グループの説明と準備体操

○集合写真撮影

○グループ練習（5km～10km）

○参加者の様子と次回の課題

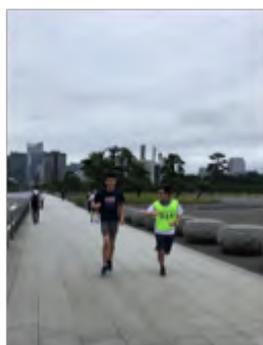
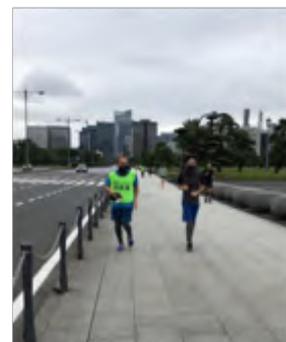
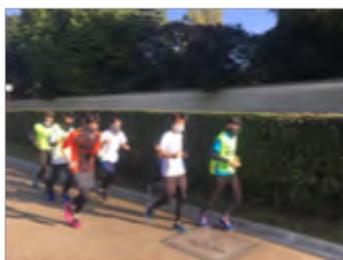
- ・前回のタイムを参考に、グループ毎のペース走を行った。各グループに保護者または教員とボランティア学生が入るように組み合わせたため、ボランティア学生と参加者の関わりが増えた（他の活動も含めて回を重ねている方は、積極的に生徒に関わっていた）。
- ・親子でマイペースに走る/歩くのが良い方、仲間やボランティア学生との関わりをしたい方、それぞれの楽しみ方で参加することができたため、笑顔が多く見られた。
- ・グループ走でスタートしたのち、遅れてしまう生徒のフォローの仕方を再確認する。
- ・終わったグループは整理体操（ストレッチなど）を行い、各自解散してもらう（残る方は冷えないよう充分気を付けてもらう）。
- ・活動終了ごとに参加者、および、ボランティアへのヒアリングをすることで、素早く課題をみつけ、改善をしていく必要あり。
- ・人数が増えているため、集合解散場所を変更することについて意見あり。

【12月13日】

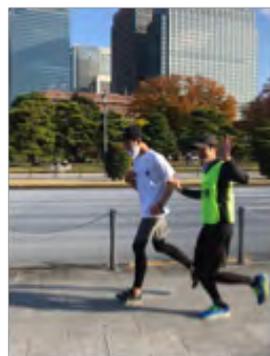
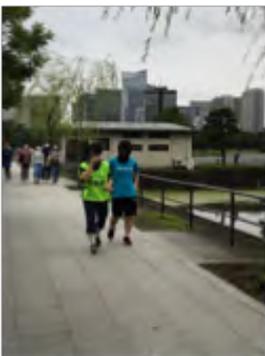
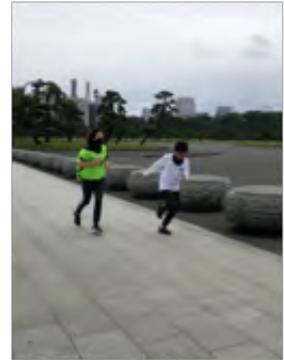
- 12月のボランティアの紹介
- グループの説明と準備体操
- グループ練習（5km～10km）
- 参加者の様子と次回の課題
  - ・前回の活動を参考に、グループ走と個人（ペア）走、ウォーキングを行なった。前回同様それぞれのグループにボランティアを割り当てた。
  - ・今回から参加したボランティアに、障害者スポーツ指導員（中級）を有する方がいた。参加者、ボランティアへ専門的な視点から指導や助言をしていただくことができた。
  - ・活動場所のルールや、マナーについて、周知が必要。
  - ・グループごとに目標タイムを設定したことで、目的意識を持って取り組むことができた。

【1月】【2月】

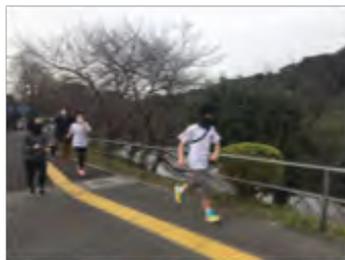
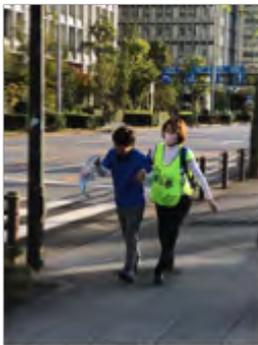
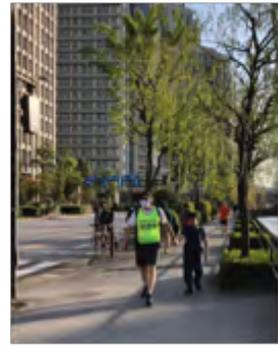
新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令により、中止。



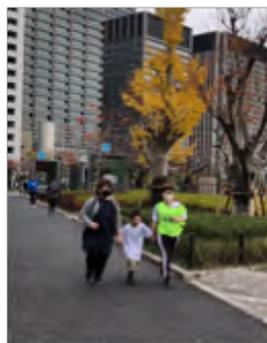
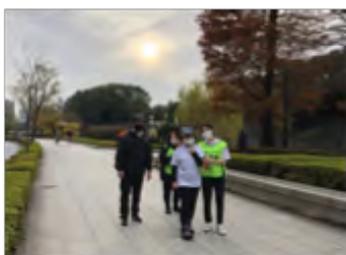
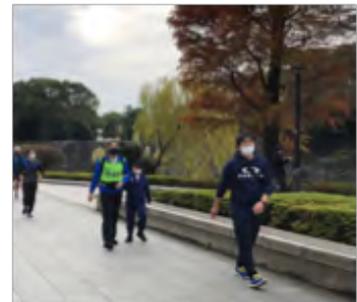
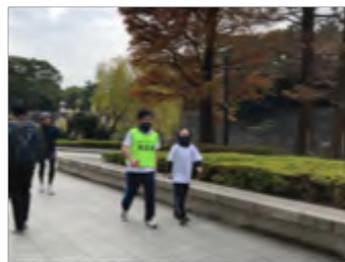
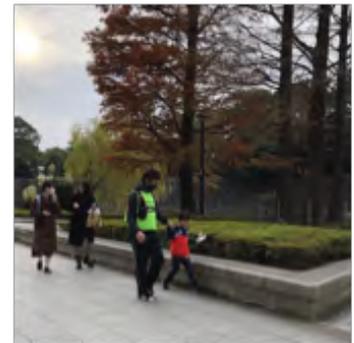
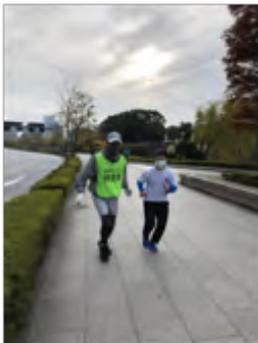
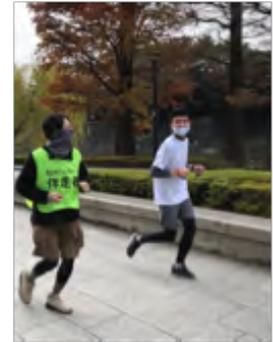
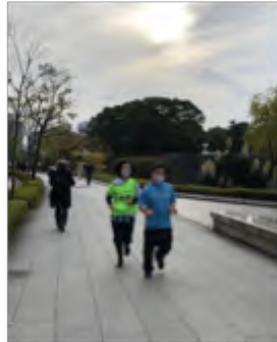
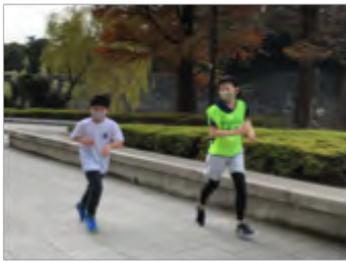
2-1 大塚ランニングサークル活動記録



2-1 大塚ランニングサークル活動記録



2-1 大塚ランニングサークル活動記録



## 2-2 大塚卓球（テーブルテニス）クラブ活動記録

卓球を、本プロジェクトの活動に選定した理由は以下の3つである。

- ・オリンピック・パラリンピックの正式種目であることから知名度が高い。
- ・卓球バレー、ごろ卓球、卓球というように参加者の人数や運動能力・技術に応じてルールや道具を工夫しやすい色々な楽しみ方ができる競技であり、余暇の充実につながる。
- ・昨年度 PTA の放課後活動として取り組んだ実績がある。

今年度の大塚卓球（テーブルテニス）クラブには、本人が22名（平日の放課後に活動時間を設定したため、小学部・中学部・高等部の在校生のみ）、保護者・ボランティアが9名（うち、2名は附属学校群の高校生）の登録があり、9月、10月、11月、12月、1月、2月に活動を実施した（1月、2月は緊急事態宣言の発令中であったが、平日の登校日であったため、参加者を検討の上、実施した）。各月の参加者を以下に示す。

|           | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 |
|-----------|----|-----|-----|-----|----|----|
| 参加者       | 17 | 21  | 22  | 22  | 14 | 14 |
| ボラ<br>保護者 | 13 | 21  | 20  | 23  | 6  | 8  |

\* 1月は保護者会と同時開催だったため、「一人で安全に参加できる生徒」と限定し、中学部高等部の生徒が参加した。

\* 2月は緊急事態宣言の延長下であることに加え、指導者の体調不良を理由に、高等部生徒のみの参加とした。

### 主な活動内容

#### 【9月18日】

- 挨拶、出席確認、コーチ・ボランティアの紹介
- 準備体操
- ウォーミングアップ（ラケットの上でボールを打つ）
- 練習1（コーチ、学生コーチのボールを両手持ちのラケットで打ち返す。3球交代。）
- 練習2（コーチ、学生コーチのボールをバックハンドで打ち返す。10回成功を目指す。5球交代。）
- 練習3（コーチ、学生コーチのボールをフォアハンドで打ち返す。10回成功を目指す。5球交代。）
- 参加者の様子と次回の課題
  - ・暑い時期が続くので、卓球クラブの活動時用の水分を用意するように各家庭に連絡する。
  - ・活動の間、ずっと見ていられる教職員がいない。事前準備、終了時の片付け、また、活動の記録は保護者へ依頼していく。

**【10月16日】**

- 挨拶、出席確認、コーチ・ボランティアの紹介
- 準備体操
- ウォーミングアップ（ラケットの上でボールを打つ、相手に受け渡すなど。個人→ペア→小グループへと人数を増やしながら実施）
- グループ練習（4台の卓球台ごとに実施）
  - \*内容は9月と同様のもの。
- 打ち返したボールを箱に入れる練習
- 学生コーチのプレーを見学
- 参加者の様子と次回の課題
  - ・活動開始前から卓球台を使って練習を楽しむ生徒たちの姿が見られた。
  - ・初回に比べて、生徒は随分見通しが持てるようになり、保護者の支援が必要な場面はかなり少なくなった。
  - ・生徒の技術レベルの幅は大きいですが、皆それぞれに合ったフォローを受け、「できた！」という感覚を味わうことが出来て大変楽しそうな様子が見られた。
  - ・今回はプログラムの工夫のお陰で、生徒と学生コーチの交流が沢山見られた。
  - ・活動開始（14時半）までの時間を利用して、準備運動を行ったほうが良い。
  - ・参加された学生コーチの意見や感想も参考に、より良い活動に改善していく。

**【11月20日】**

- 挨拶、出席確認、コーチ・ボランティアの紹介
- 準備体操
- ウォーミングアップ（ラケットの上でボールを打つ、相手に受け渡すなど。個人→ペア→小グループへと人数を増やしながら実施）
- グループ練習（4台の卓球台ごとに実施）
  - \*10月と同様の内容に加え、フォアとバックを交互に使用したラリーを実施。
- コーチ、学生コーチが打った本気のサーブを打ち返す練習
- 学生コーチのプレーを見学
- 参加者の様子と次回の課題
  - ・グループごとに順番を守って取り組む様子が見られるようになってきた。
  - ・打ち返したボールが入るようになってきた。
  - ・活動終了前に、疲れて座り込んでしまう様子の参加者がいた。
  - ・西日対策で、カーテンを閉めた。反面、換気の時間を設定する必要あり。保護者が体育館施設を使用できるように研修が必要。

**【12月18日】**

- 挨拶、出席確認、コーチ・ボランティアの紹介
- 準備体操
- ウォーミングアップ（ラケットの上でボールを打つ、相手に受け渡すなど。個人→ペア→小グループへと人数を増やしながら実施）

## 2-2 大塚卓球（テーブルテニス）クラブ活動記録

○グループ練習（4台の卓球台ごとに実施）

\* 11月と同様の内容。

○コーチ、学生コーチが打った本気のサーブを打ち返す練習

○学生コーチのプレーを見学

○参加者の様子と次回の課題

- ・参加者もすっかり慣れた様子でスムーズに活動出来ていた。青木コーチから「上手くなったね!」と声を掛けられて嬉しそうな表情が見られた。
- ・初参加の高校生ボランティア9名（文京区社会福祉協議会の紹介で、文京区内の私立高校から派遣）は、球拾いに専念する生徒もいれば、本校生徒に混じって卓球を楽しむ生徒もいた。本校生徒にどのように接すれば良いか分からない生徒さんが多いようだった。
- ・学生コーチ4名は2回目（隔月で近隣大学の卓球部員が参加）ということもあり、本校生徒への言葉掛けや関わりに少し慣れた様子が見られた。
- ・下校から活動開始までの時間を使って、ストレッチなどの準備運動をすることは継続課題。→参加、または、参観している保護者に依頼していく必要あり。
- ・球出しをしてもらう際に「お願いします」「ありがとうございました」と言うことになっているが、自発的に挨拶が出ない参加者がいる。保護者やボランティアでフォローをするのが良い。
- ・ボランティアの方に本校に足を運んでもらい、生徒たちを知ってもらうことがまずは大事だが、少しずつ関わりを増やせると良い。

### 【1月15日】

○挨拶、出席確認、コーチ・ボランティアの紹介

○準備体操

○ウォーミングアップ（ラケットの上でボールを打つ、相手に受け渡す、カラーコーンを狙ってボールを打ち込むなど。個人→ペア→小グループへと人数を増やししながら実施）

○グループ練習（4台の卓球台ごとに実施）

\* 12月と同様の内容に加え、フットワーク（サイドステップ）の練習。

○コーチ、学生コーチが打った本気のサーブを打ち返す練習

○学生コーチのプレーを見学

○参加者の様子と次回の課題

- ・練習開始を待つ間に、これまで教えていただいた練習メニューに取り組む様子が見られた。個人練習だけでなく、友達同士声を掛け合って取り組んでいた。
- ・保護者会のため、終盤までコーチ、学生コーチのみの練習となったが特に混乱は見られなかった。

### 【2月19日】

○挨拶、出席確認、コーチ・ボランティアの紹介

○準備体操

○ウォーミングアップ（ラケットの上でボールを打つ、相手に受け渡す、カラーコーンを狙ってボールを打ち込むなど。個人→ペア→小グループへと人数を増やししながら実施）

## 2-2 大塚卓球（テーブルテニス）クラブ活動記録

○グループ練習（4台の卓球台ごとに実施）

\* 1月と同様の内容。

○コーチ、学生コーチが打った本気のサーブを打ち返す練習

○学生コーチのプレーを見学

○参加者の様子と次回の課題

- ・最終回は高等部のみの参加であったが、非常に落ち着いた様子で活動に参加できていた。年間を通じて有意義な活動とすることができた。
- ・活動を継続することを考えると、出席確認、活動場所の準備と片付け、活動中の支援、活動の記録には保護者やボランティアの積極的な協力が必須である。また、現状学校の用具を貸し出ししている用具（ラケットやボールといった消耗品）についても、個人で準備をしてもらい、会費を集めて更新していくなどの対策が必要。

2-2 大塚卓球（テーブルテニス）クラブ活動記録



2-2 大塚卓球（テーブルテニス）クラブ活動記録



## 2-3 大塚ドッチビークラブ活動記録

ドッチビー（ディスクドッチ）を使用した運動を、本プロジェクトの活動に選定した理由は以下の3つである。

- ・簡単なルールのある集団スポーツを楽しむことができる。
- ・ディスクドッチやゴールドドッチは、使用する用具や種目の特徴から怪我が少ない一方で、短時間で運動量を確保できる。
- ・基本的なスキルを身につけ、用具の取扱いに慣れることで、全国障害者スポーツ大会の正式種目であるフライングディスク競技へ発展的に取り組める。

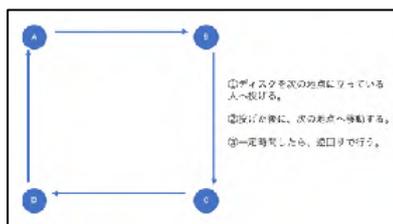
今年度の大塚ドッチビークラブには、本人・きょうだい・卒業生が26名、保護者・ボランティアが21名の登録があり、9月、10月、11月、12月、2月に活動を実施した（1月は緊急事態宣言が発令されたため中止、2月は緊急事態宣言が延長中であったためオンライン教室を試行した）。各月の参加者を以下に示す。

|           | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 |
|-----------|----|-----|-----|-----|----|----|
| 参加者       | 20 | 23  | 20  | 15  |    | 13 |
| ボラ<br>保護者 | 27 | 30  | 27  | 23  |    | 11 |

## 主な活動内容

## 【9月27日】

- 事業の説明
- 9月の講師、ボランティアの紹介
- 準備体操
- 参加者のスロー&キャッチに関する技術の測定
- ①キャッチ&スロー（模範演技の後、2人組、対面で実施）
- ②シッティングスロー（椅子に座った状態で、ディスクゴールに向かってスローイング）
- ③スタンディングスロー（立位で、ディスクゴールに向かってスローイング）
- ④キャッチング（講師が投げるディスクを参加者がキャッチする）
- ⑤スクエアパス（右図参照）



## ⑥ディスクゲッターゲーム

※1～9までの番号を撃ち抜くストラックアウト

※トランプ（1～9、ジョーカー）を引いてトランプと同じ番号をねらう。ジョーカーが出たらどこを狙っても良い。

⑦中当てゲーム（ディスクドッジの簡易版。四角のコートの中に参加者が入り、講師が外側からディスクを投げる。参加者がキャッチできればセーフ、キャッチできない、又は、当たってしまったらアウトになりコートの外へ出る。制限時間内アウトにならなかったら拍手で賞賛される。

○参加者の様子と次回の課題

- ・参加者は概ね、楽しそうに活動していた。
- ・「密」となるシーンが少なからず有り。
- ・年齢差（小学生低学年と高校生）を一緒にするのは難しい。次回から小学部・中学部グループと、高等部・卒業生グループで2分割して実施する。

### 【10月25日】

○10月の講師・ボランティア紹介

○準備体操

○グループ練習

A グループ（高等部・卒業生）

- ①キャッチ&スロー ②ディスクゲッター×2周 ③スクエアパス ④三角パス

B グループ（小学部・中学部）

- ①シッティングスロー ②スタンディングスロー ③ディスクゲッター  
④シッティングキャッチ

○全体練習

①中当てゲーム

②ディスクドッジゲーム（詳細は日本ドッジビー協会 HP、又は、報告書内資料を参照）

<https://www.dbja.jp/main/products/sports.htm#ddg>



○参加者の様子と次回の課題

- ・9月よりも、スロー・キャッチともにスキルが上達しているように見えた。また、ボランティアや協会スタッフと参加者たちのコミュニケーションが増加していた。
- ・参加者同士でサポートしあい、投げる方向などを教えあう様子が見られた。
- ・参加者のレベルや志向（試合で勝つことを目指すか、楽しむことを優先するか、基礎技術を高めることに集中するかなど）に合わせた内容での実施は課題。そのためには、個人のスロー回数の増加（練習量の確保）が大切。
- ・保護者やボランティアの方々にも満足していただける（ドッジビーを楽しんだと思える）内容も提供する。ユニファイド部門（障がい者と健常者の分けなくおこなう特別ルールの大会）の紹介も行う。

**【11月29日】**

○11月の講師とボランティアの紹介

○講習の流れの説明と準備体操

○グループ練習

A グループ（高等部・卒業生）

①キャッチ&スロー ②スクエアパス（近距離・長距離）

B グループ（小学部・中学部）

①シッティングスロー ②スタンディングスロー ③ディスクゲッター

④シッティングキャッチ ⑤スタンディングキャッチ

○全体練習

①中当てゲーム ②ディスクドッジゲーム

○参加者の様子と次回の課題

- ・参加者のスロー・キャッチスキルが上達しているように見えた。
- ・これまでは、協会スタッフやボランティアから参加者に声をかけるほうが多かったが、参加者から協会スタッフに声をかける様子も見られるなど、協会スタッフおよびボランティアと参加者のコミュニケーションが更に増加していた。
- ・保護者が参加すると、自分の子ども以外の子どもを積極的にサポートしたり励ます様子が見られた。
- ・保護者もドッジビーを楽しみ、笑顔になっているように見えた。
- ・参加者のレベルや志向に合わせた内容での実施は継続課題。
- ・ゲーム時の保護者およびボランティアの方々のスロー回数の増加（遠慮してしまう様子が見られる。共に楽しむため、参加するためには、改善が必要と思われる）。
- ・会場のスペース確保の問題（ゲーム時の密集回避）
- ・参加する協会スタッフによって障害に対する知識や理解に差がある。

**【12月27日】**

○12月の講師とボランティアの紹介

○講習の流れの説明と準備体操

○グループ練習

A グループ（高等部・卒業生）

①キャッチ&スロー ②スクエアパス（近距離・長距離）

B グループ（小学部・中学部）

①シッティングスロー ②スタンディングスロー ③ディスクゲッター

④シッティングキャッチ ⑤スタンディングキャッチ

○全体練習

①中当てゲーム ②ディスクドッジゲーム

○参加者の様子と次回の課題

- ・参加者のスロー・キャッチスキルが上達しているように見えた。

- ・ これまでは、協会スタッフやボランティアから参加者に声をかけるほうが多かったが、参加者から協会スタッフに声をかける様子も見られるなど、協会スタッフおよびボランティアと参加者のコミュニケーションが更に増加していた。
- ・ 保護者が参加すると、自分の子ども以外の子どもを積極的にサポートしたり励ます様子が見られた。
- ・ 保護者もドッジビーを楽しみ、笑顔になっているように見えた。
- ・ 参加者のレベルや志向に合わせた内容での実施は継続課題。
- ・ ゲーム時の保護者およびボランティアの方々のスロー回数の増加（遠慮してしまう様子が見られる。共に楽しむため、参加するためには、改善が必要と思われる）。
- ・ 会場のスペース確保の問題（ゲーム時の密集回避）
- ・ 参加する協会スタッフによって障害に対する知識や理解に差がある。

### 【1月】

新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令により、中止。

### 【2月23日】

オンライン配信による講習会を試行。

○本日の活動について説明

○準備体操（ドッジビー体操）の視聴

○ドッジビー体操の動きの説明と、部分練習、通し練習  
ドッジビー体操（日本ドッジビー協会公式体操）

[https://www.youtube.com/watch?v=\\_mYGiAgj9Nc](https://www.youtube.com/watch?v=_mYGiAgj9Nc)

○ドッジビーを使ったストレッチの説明と指導

ドッジビーを持った腕を前に伸ばして左右にねじる／腕を上を伸ばして左右に上体を曲げ体側を伸ばす／腕を上を伸ばしたまま徐々に大きく回していくことで回旋／ドッジビーを持った腕を胸の高さで前に伸ばし、腿上げ（膝をドッジビーにつける）

○室内、家庭でもできるドッジビーの練習

・ 投げ上げ、投げ上げ拍手キャッチ

・ ボブリング（徐々に回数を増やしていく）

○日本ドッジビー協会からのお知らせ（今後の活動、大会について）

○講師、ボランティア紹介



2-3 大塚ドッチビークラブ活動記録





## 本事業の効果について（アンケート結果より）

文責：中村真博（TOGSP プロジェクトコーディネーター）

### 【はじめに】

本事業の効果を検証することを目的に、以下のアンケート調査（調査項目の詳細は巻末資料4-1、4-2、4-3、4-4、41p～58pを参照）を実施した。

アンケート実施に際し、プライバシーや匿名性は担保されることを明記した上で、本事業参加前後の効果を検証するために、生年月日を回答いただくことで参加前後の回答者を一致させている。

なお、本事業の実施場所は知的障がいを対象とする特別支援学校であり、コロナ禍の影響もあり今年度の活動への参加は在校生および卒業生に限定されたため、回答を得られた参加者本人の障がいは知的・発達障がいのみとなっている。

また、本事業にはボランティア同様、保護者にも活動に参加していただき、参加者との積極的な交流を行っていただいているため、ボランティアと保護者は区別せず分析を行っている。

### 【調査概要】

対象：本事業への参加者本人（保護者による代理回答可）および保護者、ボランティア

時期：2020年10月（事前）、2021年1月（事後）

方法：Google フォームを用いた無記名式のアンケート調査

### 【質問項目】（詳細は巻末資料を参照）

#### ▶ 参加者本人<sup>1</sup>

身体的効果：4項目      心的・精神的効果：7項目      社会的効果：8項目

#### ▶ 保護者・ボランティア<sup>2,3</sup>

知的障がい者に対する認識：15項目      障がい者福祉に対する認識と態度：6項目

ボランティア参加による学習効果：13項目

<sup>1</sup> 田引俊和・松本耕二・仲野隆士・渡邊浩美（2015）知的障害者スポーツの効果・影響に関する検討，北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 8, pp. 267-272.

<sup>2</sup> 加藤彩乃（2017）知的障害者とのスポーツ交流が大学生の障害認識に与える影響，長野体育学研究 23, pp. 9-17.

<sup>3</sup> 木村充・河合亨（2012）サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究：立命館大学「地域活性化ボランティア」を事例として，日本教育工学会論文誌 36（30），pp. 227-238.

## 【回答者の属性】

回答者の属性は表1の通りである。

なお、前述した通り、参加者本人の障がいは知的・発達障がいである。また、本事業参加以前にも28名(82.4%)が日常的に運動・スポーツに取り組んでいたと回答した。

保護者・ボランティアの内訳は、保護者35名(85.4%)、ボランティア6名(14.6%)である。また、本事業参加以前にも障がい者とともに運動・スポーツを実施した経験がある人は28名(68.3%)であった。

表1. 回答者の属性

|    | 参加者本人  |       | 保護者・ボランティア |        |       |      |
|----|--------|-------|------------|--------|-------|------|
|    | n      | %     | n          | %      |       |      |
| 性別 | 男      | 22    | 64.7       | 男      | 10    | 24.4 |
|    | 女      | 12    | 35.3       | 女      | 31    | 75.6 |
| 年齢 | 小学部    | 6     | 17.6       | 19歳以下  | 2     | 4.9  |
|    | 中学部    | 7     | 20.6       | 20~29歳 | 2     | 4.9  |
|    | 高等部    | 15    | 44.1       | 30~39歳 | 2     | 4.9  |
|    | ・ OBOG | 6     | 17.6       | 40~49歳 | 10    | 24.4 |
| 所属 |        |       | 50~59歳     | 23     | 56.1  |      |
|    |        |       | 60歳以上      | 1      | 2.4   |      |
|    |        |       | 欠損値        | 1      | 2.4   |      |
| 合計 | 34     | 100.0 | 合計         | 41     | 100.0 |      |

## 【調査結果①】

以下、本事業実施後の単純集計結果を調査項目ごとに示す。

### ▶ 参加者本人

#### 1. 身体的効果

参加者本人は、どの項目においても80.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、本事業の身体的効果は高かったと認識している。

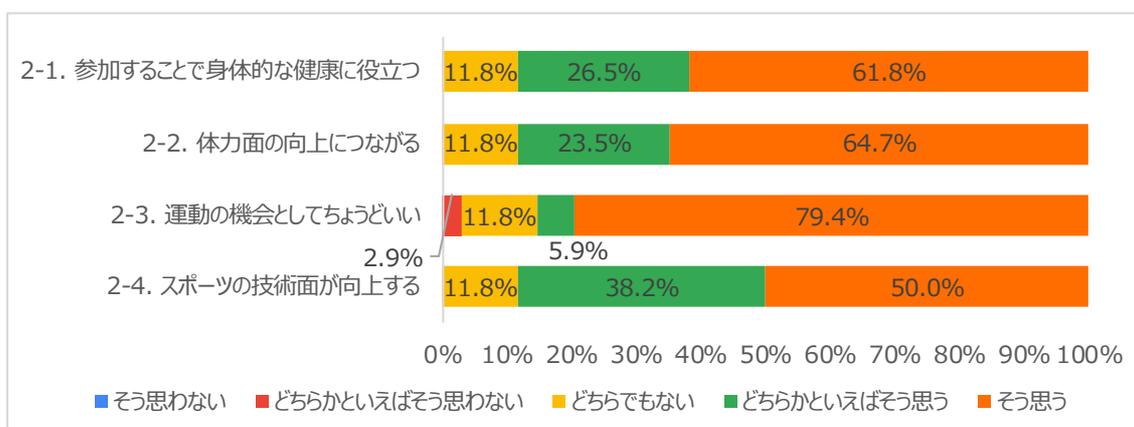


図1. 参加者本人への身体的効果 (n=34)

### 3-1 本事業の効果について（アンケート結果より）

#### 2. 心的・精神的効果

参加者本人は、多くの項目において 80.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、本事業の心的・精神的効果は高かったと認識している。なかでも、94.6%が「プログラムのある日が楽しみだ」と回答している。

しかし、「家族関係が良くなった」については、55.9%が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答したものの、44.1%が「どちらかといえばそう思わない」「どちらでもない」と回答した。

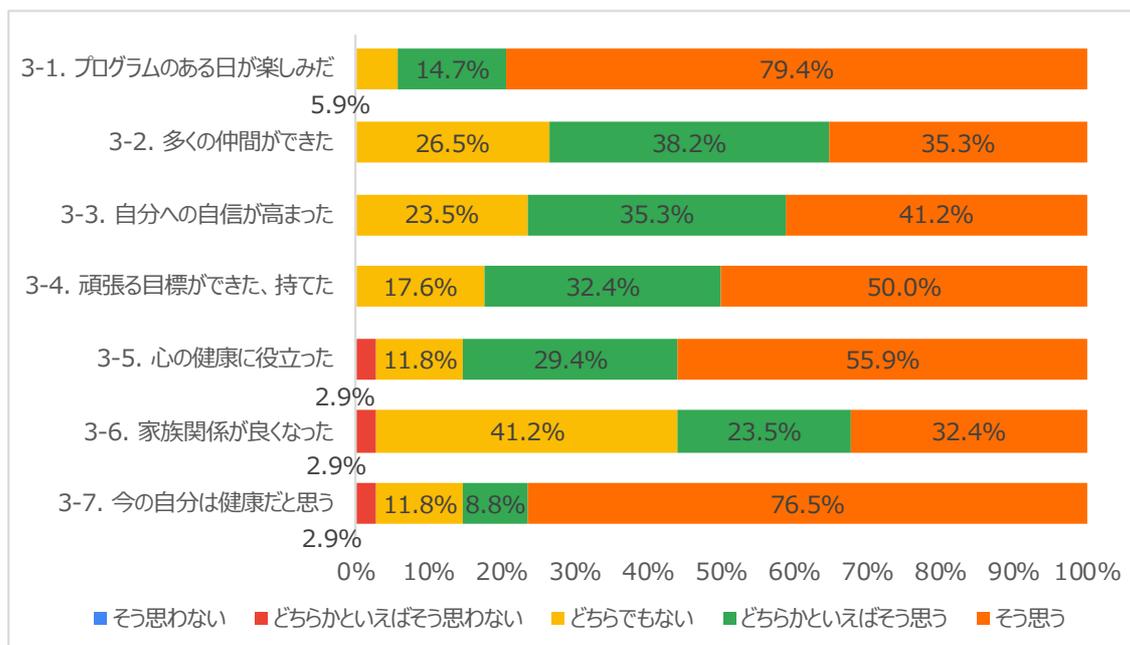


図 2. 参加者本人への心的・精神的効果 (n=34)

#### 3. 社会的効果

参加者本人は、「日常生活上の動作が高まった」「日常生活の質が高まった」「仕事や学校などに前向きに取り組めるようになった」「集団行動ができるようになった」「コミュニケーション能力が向上した」「スポーツへの関心が高まった」において、60.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。

一方、「衝動性や攻撃性などが低減された」においては 70.0%以上が「そう思わない」「どちらでもない」と回答し、「地域社会とのつながりが増えた」においては 50.0%の人が「どちらかといえばそう思わない」「どちらでもない」と回答した。

本事業の社会的効果は、身体的効果、心的・精神的効果と比較すると、高くないと認識している。

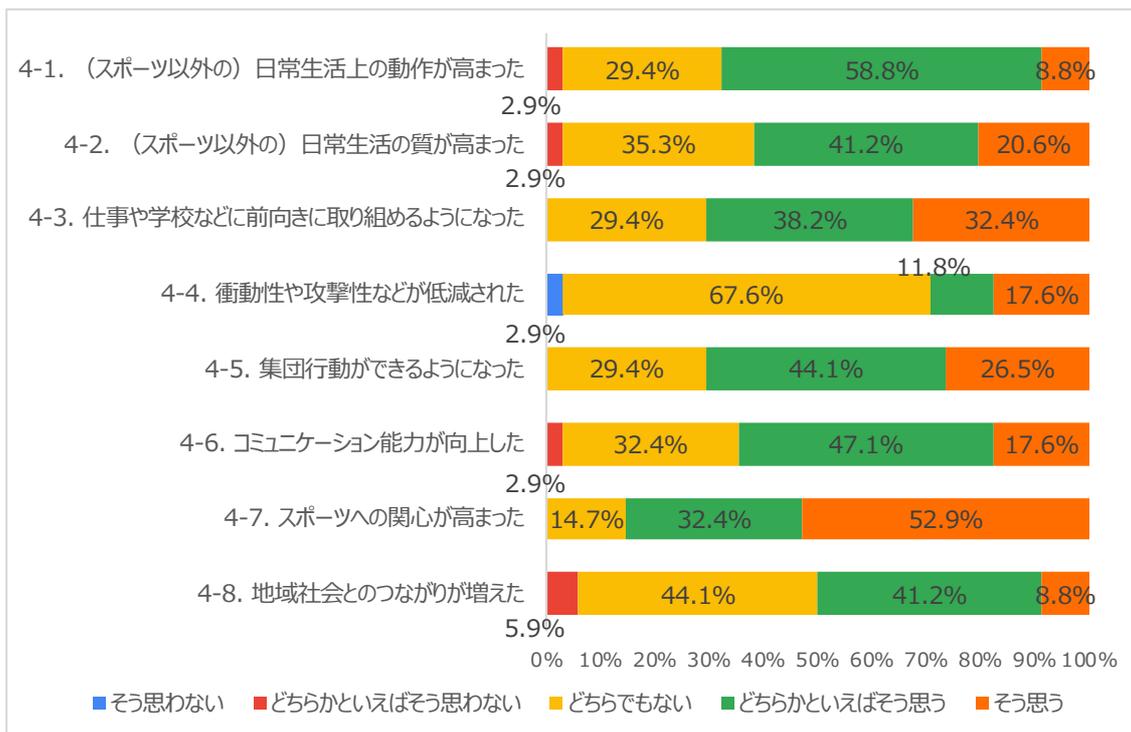


図 3. 参加者本人への社会的効果 (n=34)

## ▶ 保護者・ボランティア

### 1. 知的障がい者に対する認識

参加者本人は、「他者と良好な関係を築くことができる」「家族以外の人と接する機会を持つのがよい」「スポーツの技術を向上させることができる」「大勢の仲間と楽しむことができる」「スポーツを行うことは生活の中で重要だ」において、80.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。「身の回りのことを自分ですることができる」において、70.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。「障がいのない人と一緒に学校で学んだり、働いたりすることができる」において、60.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。「できるスポーツが限られている」「知的障がいは一つの個性である」において、50.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。また、「スポーツを行うことは危険だ」においては、80.0%以上の人が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答し、「障がいのない人と別々にスポーツをした方がよい」「知的障がいのある人のスポーツは、面白さが足りない」においては、60.0%以上の人が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答し

一方、「家族で世話をするのがよい」においては40.0%以上が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答し、「様々な面で差別を受けている」においては70.0%の人が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と回答した。また、「できるスポーツが限られている」においては、50.0%以上の人が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。

### 3-1 本事業の効果について（アンケート結果より）

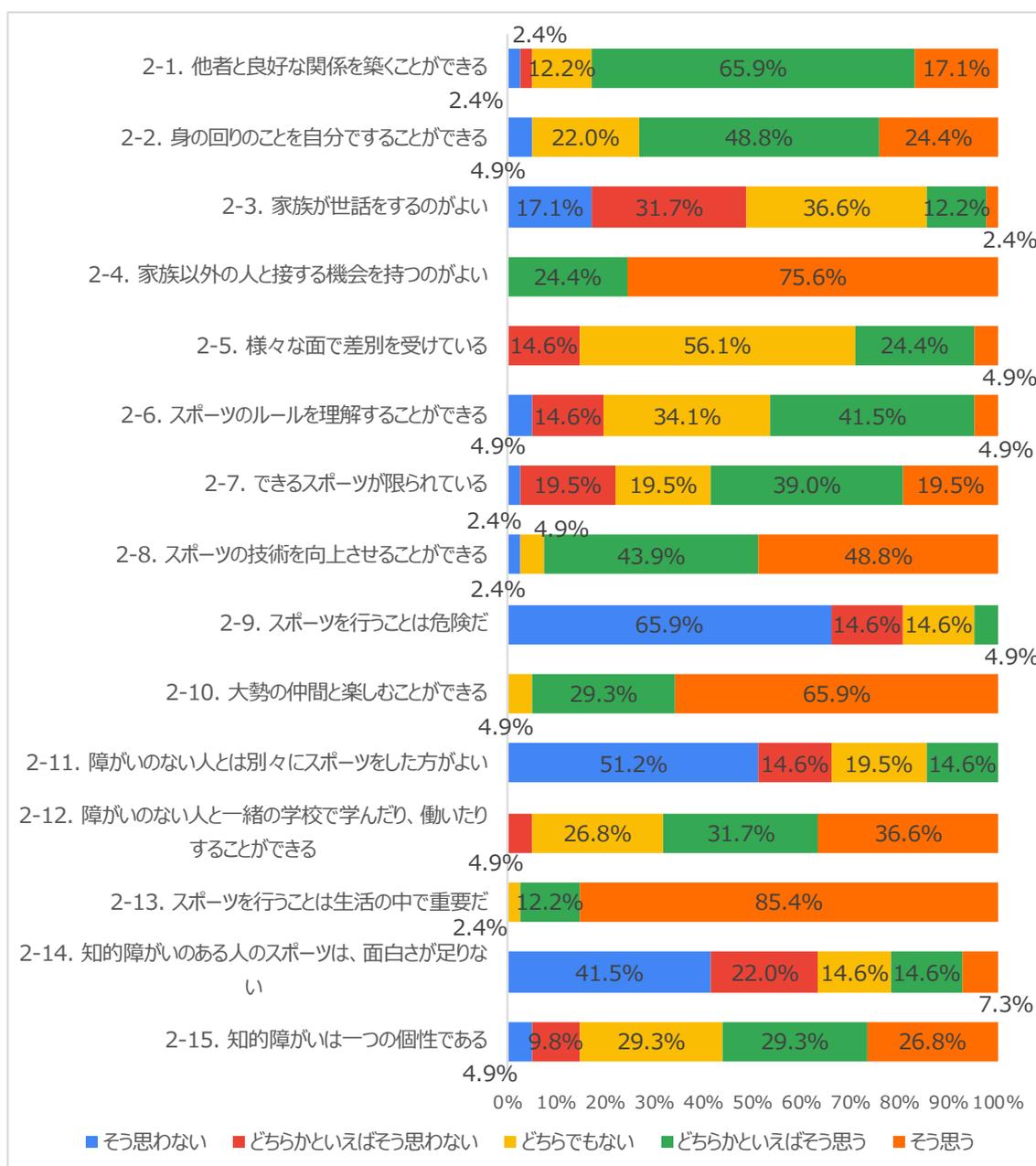


図 4. 保護者・ボランティアの知的障がい者に対する認識（n=41）

## 2. 障がい者福祉に対する認識と態度

保護者・ボランティアは、多くの項目において 70.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、障がい者福祉に対するポジティブな認識・態度を示した。

しかし、「知的障がいのある人にスポーツを教えることができる」「自分に障がいがあったら、障がいのない人と一緒にスポーツをしたい」においては、他の項目よりも「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」「どちらでもない」と回答する割合が高かった。

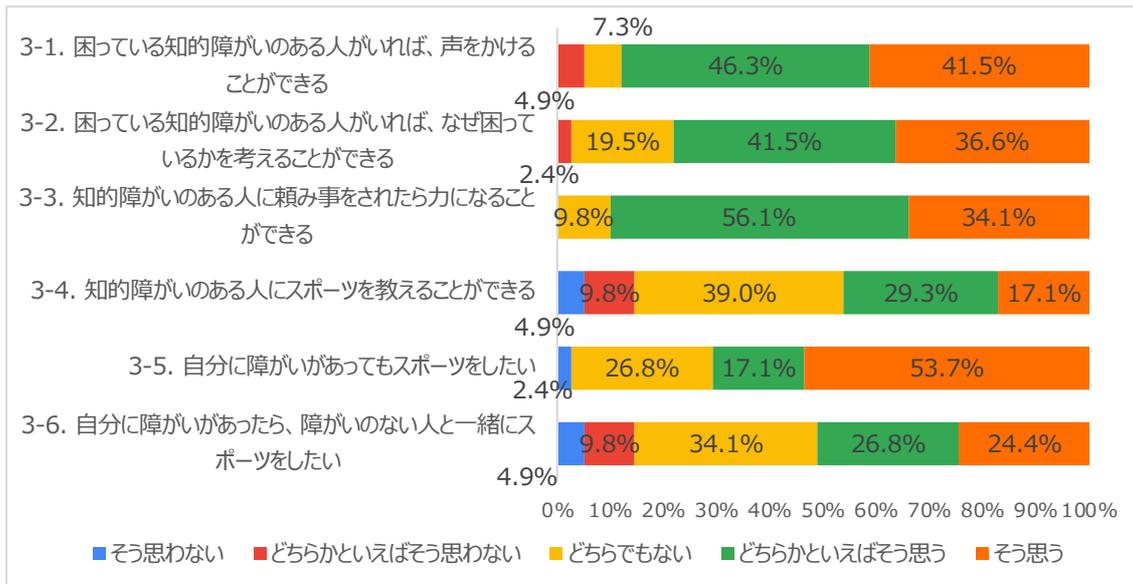


図 5. 保護者・ボランティアの障がい者福祉に対する認識と態度 (n=41)

### 3. ボランティア参加による学習効果

保護者・ボランティアは、多くの項目において 70.0%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、ボランティア参加による学習効果が高かったと認識している。

しかし、「自分が探求していきたいテーマが見つかった」「今後地域の障がい者との活動に関わっていきたい」においては、他の項目よりも「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」「どちらでもない」と回答する割合が高かった。回答者の属性はボランティアよりも保護者が多く、以上の回答に影響を与えている可能性は考えられるが、100.0%の人が「共生社会の形成に向けて、障がい者が暮らしやすい地域にしていくことが重要である」と回答している。したがって、障がい者が暮らしやすいような地域の変革が必要ではあるが、自身がその変革に関わることについては、自信がない、もしくは荷が重い、もしくはその他の理由によって積極的でないことが示唆された。

### 3-1 本事業の効果について（アンケート結果より）

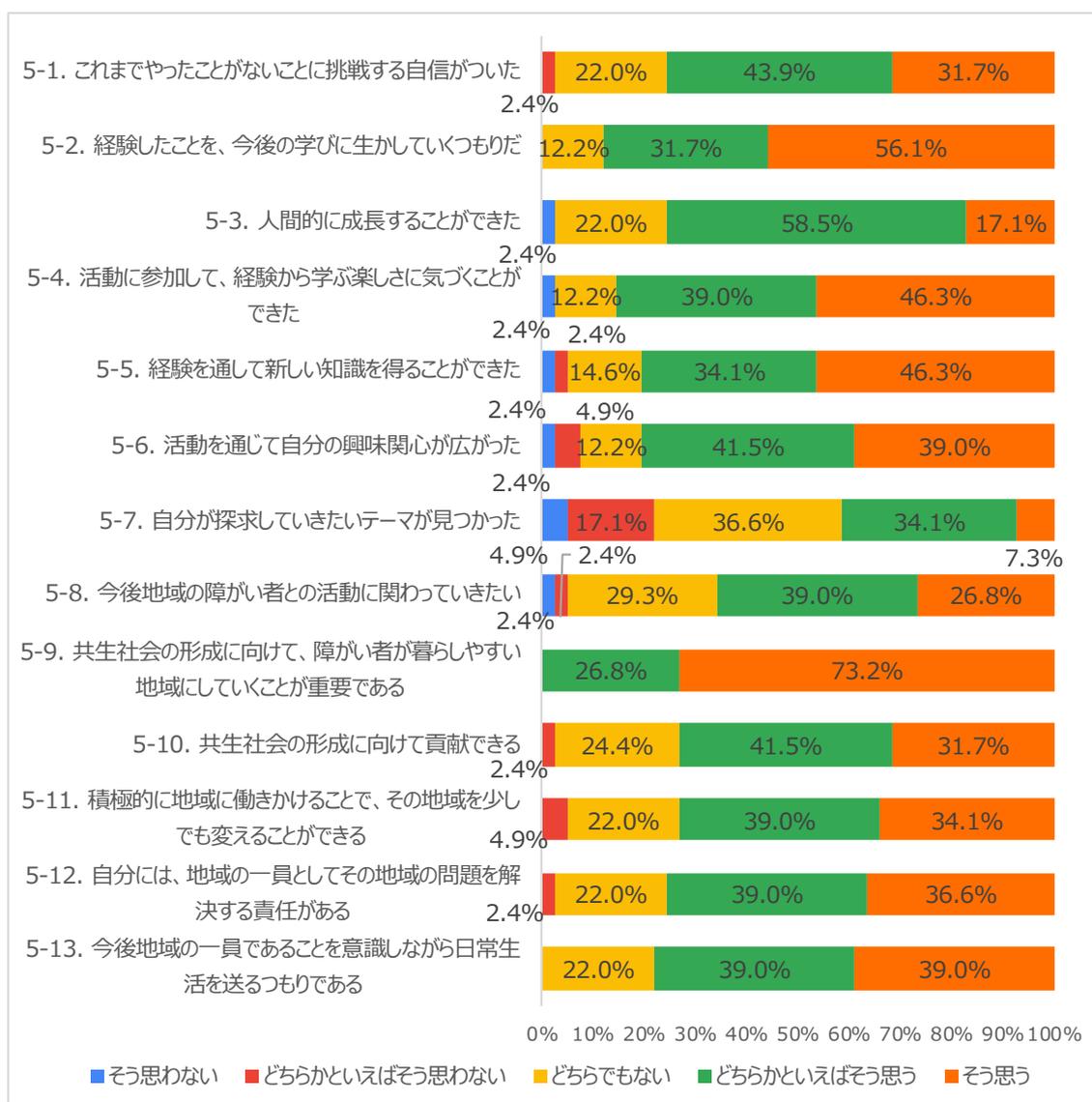


図 6. 保護者・ボランティアのボランティア参加による学習効果（n=41）

#### 【調査結果②】

以下、本事業参加前後におけるアンケート調査の比較結果を調査項目ごとに示す。

分析に際しては、選択肢の「1. そう思わない」から「5. そう思う」までを1～5点に得点化し、回答者の平均値について、対応のあるt検定を実施した。有意水準は5.0%とするが、表内の「有意差」欄においては、10.0%までを記載している。

なお、前述した通り、回答者の生年月日により参加前後の回答結果を一致させている。したがって、事前アンケートもしくは事後アンケートのみの生年月日も存在するため、n数は単純集計結果よりも減少している。

▶ 参加者本人

1. 身体的効果

参加者本人への身体的効果については、事前・事後アンケートでの回答結果に有意な差はみられなかった。

表 2. (対応のある t 検定) (n=21)

| 効果                    | 質問番号 | 質問項目              | 回答時 | 平均値  | 標準偏差 | 有意差 |
|-----------------------|------|-------------------|-----|------|------|-----|
| 身<br>体<br>的<br>効<br>果 | 2-1  | 参加することで身体的な健康に役立つ | 事前  | 4.57 | 0.75 |     |
|                       |      |                   | 事後  | 4.43 | 0.81 |     |
|                       | 2-2  | 体力面の向上につながる       | 事前  | 4.67 | 0.58 |     |
|                       |      |                   | 事後  | 4.48 | 0.75 |     |
|                       | 2-3  | 運動の機会としてちょうどいい    | 事前  | 4.81 | 0.51 |     |
|                       |      |                   | 事後  | 4.52 | 0.93 |     |
|                       | 2-4  | スポーツの技術面が向上する     | 事前  | 4.10 | 0.89 |     |
|                       |      |                   | 事後  | 4.38 | 0.74 |     |

2. 心的・精神的効果

参加者本人への心的・精神的効果については、「多くの仲間ができると思う、作りたい(できた)」において、事前・事後アンケートでの回答結果に有意な差がみられた。前述した通り、本事業の参加者はコロナ禍の影響もあり在校生および卒業生に限定されたため、小学部・中学部・高等部・OBOG という枠組みを越える活動は実施できたものの、既存のコミュニティでの活動にとどまってしまったことが影響を与えていると考えられる。

表 3. (対応のある t 検定) (n=21)

| 効果                                   | 質問番号 | 質問項目                             | 回答時 | 平均値  | 標準偏差 | 有意差   |
|--------------------------------------|------|----------------------------------|-----|------|------|-------|
| 心<br>的<br>・<br>精<br>神<br>的<br>効<br>果 | 3-1  | プログラムのある日が楽しみだ                   | 事前  | 4.52 | 0.98 | p<.05 |
|                                      |      |                                  | 事後  | 4.71 | 0.56 |       |
|                                      | 3-2  | 多くの仲間ができると思う、作りたい<br>多くの仲間ができた   | 事前  | 4.48 | 0.93 |       |
|                                      |      |                                  | 事後  | 4.00 | 0.77 |       |
|                                      | 3-3  | 自分への自信を高めたい<br>自分への自信が高まった       | 事前  | 4.19 | 0.81 |       |
|                                      |      |                                  | 事後  | 4.19 | 0.81 |       |
|                                      | 3-4  | 頑張る目標を作りたい、持ちたい<br>頑張る目標ができた、持てた | 事前  | 4.19 | 1.03 |       |
|                                      |      |                                  | 事後  | 4.19 | 0.87 |       |
|                                      | 3-5  | 心の健康に役立つと思う<br>心の健康に役立った         | 事前  | 4.10 | 1.14 |       |
|                                      |      |                                  | 事後  | 4.29 | 0.96 |       |
|                                      | 3-6  | 家族関係が良くなると思う<br>家族関係が良くなった       | 事前  | 3.95 | 1.07 |       |
|                                      |      |                                  | 事後  | 3.90 | 0.94 |       |
|                                      | 3-7  | 今の自分は健康だと思う                      | 事前  | 4.48 | 0.81 |       |
|                                      |      |                                  | 事後  | 4.48 | 0.98 |       |

3-1 本事業の効果について（アンケート結果より）

3. 社会的効果

参加者本人への社会的効果については、事前・事後アンケートでの回答結果に有意な差はみられなかったが、「仕事や学校などに前向きに取り組めるようになる（なった）」において、わずかな差（10.0%水準）がみられた。

表 4. （対応のある t 検定）（n=21）

| 効果    | 質問番号 | 質問項目                    | 回答時 | 平均値  | 標準偏差 | 有意差   |
|-------|------|-------------------------|-----|------|------|-------|
| 社会的効果 | 4-1  | (スポーツ以外の) 日常生活上の動作が高まる  | 事前  | 3.57 | 1.03 | p<.10 |
|       |      | (スポーツ以外の) 日常生活上の動作が高まった | 事後  | 3.52 | 0.75 |       |
|       | 4-2  | (スポーツ以外の) 日常生活の質が高まる    | 事前  | 3.86 | 1.11 |       |
|       |      | (スポーツ以外の) 日常生活の質が高った    | 事後  | 3.71 | 0.96 |       |
|       | 4-3  | 仕事や学校などに前向きに取り組めるようになる  | 事前  | 4.19 | 0.81 |       |
|       |      | 仕事や学校などに前向きに取り組めるようになった | 事後  | 3.76 | 0.83 |       |
|       | 4-4  | 衝動性や攻撃性などが低減される         | 事前  | 3.19 | 1.03 |       |
|       |      | 衝動性や攻撃性などが低減された         | 事後  | 3.38 | 0.74 |       |
|       | 4-5  | 集団行動ができるようになる           | 事前  | 4.14 | 1.01 |       |
|       |      | 集団行動ができるようになった          | 事後  | 3.90 | 0.83 |       |
|       | 4-6  | コミュニケーション能力が向上する        | 事前  | 3.90 | 1.18 |       |
|       |      | コミュニケーション能力が向上した        | 事後  | 3.71 | 0.72 |       |
|       | 4-7  | スポーツへの関心が高まる            | 事前  | 4.43 | 0.68 |       |
|       |      | スポーツへの関心が高まった           | 事後  | 4.29 | 0.78 |       |
|       | 4-8  | 地域社会とのつながりが増える          | 事前  | 3.76 | 0.94 |       |
|       |      | 地域社会とのつながりが増えた          | 事後  | 3.43 | 0.81 |       |

▶ 保護者・ボランティア

1. 知的障がい者に対する認識

保護者・ボランティアの知的障がい者に対する認識については、「スポーツの技術を向上させることができる」「大勢の仲間と楽しむことができる」「スポーツを行うことは生活の中で重要だ」において事前・事後アンケートでの回答結果に有意な差がみられた。以上の項目において、事前アンケートにおける「期待」に対して、事業実施後の事後アンケートでの結果がポジティブに変容した。

表 5. (対応のある t 検定) (n=25)

| 効果           | 質問番号                            | 質問項目                | 回答時  | 平均値  | 標準偏差  | 有意差   |
|--------------|---------------------------------|---------------------|------|------|-------|-------|
| 知的障がい者に対する認識 | 2-1                             | 他者と良好な関係を築くことができる   | 事前   | 3.80 | 1.04  | p<.10 |
|              |                                 |                     | 事後   | 3.96 | 0.84  |       |
|              | 2-2                             | 身の回りのことを自分ですることができる | 事前   | 3.72 | 0.89  |       |
|              |                                 |                     | 事後   | 3.96 | 0.89  |       |
|              | 2-3                             | 家族が世話をするのがよい        | 事前   | 2.32 | 0.85  |       |
|              |                                 |                     | 事後   | 2.40 | 0.96  |       |
|              | 2-4                             | 家族以外の人と接する機会を持つのがよい | 事前   | 4.68 | 0.75  |       |
|              |                                 |                     | 事後   | 4.68 | 0.48  |       |
|              | 2-5                             | 様々な面で差別を受けている       | 事前   | 3.20 | 1.04  |       |
|              |                                 |                     | 事後   | 3.16 | 0.80  |       |
|              | 2-6                             | スポーツのルールを理解することができる | 事前   | 3.44 | 0.77  |       |
|              |                                 |                     | 事後   | 3.56 | 0.77  |       |
|              | 2-7                             | できるスポーツが限られている      | 事前   | 3.84 | 0.85  |       |
|              |                                 |                     | 事後   | 3.44 | 0.96  |       |
|              | 2-8                             | スポーツの技術を向上させることができる | 事前   | 4.00 | 0.82  |       |
| 事後           |                                 |                     | 4.40 | 0.58 |       |       |
| 2-9          | スポーツを行うことは危険だ                   | 事前                  | 1.60 | 0.71 |       |       |
|              |                                 | 事後                  | 1.52 | 0.87 |       |       |
| 2-10         | 大勢の仲間と楽しむことができる                 | 事前                  | 4.08 | 1.08 | p<.05 |       |
|              |                                 | 事後                  | 4.56 | 0.51 |       |       |
| 2-11         | 障がいのない人とは別々にスポーツをした方がよい         | 事前                  | 1.96 | 1.02 |       |       |
|              |                                 | 事後                  | 1.84 | 1.07 |       |       |
| 2-12         | 障がいのない人と一緒に学校で学んだり、働いたりすることができる | 事前                  | 3.76 | 0.93 |       |       |
|              |                                 | 事後                  | 4.04 | 0.89 |       |       |
| 2-13         | スポーツを行うことは生活の中で重要だ              | 事前                  | 4.60 | 0.58 | p<.05 |       |
|              |                                 | 事後                  | 4.76 | 0.52 |       |       |
| 2-14         | 知的障がいのある人のスポーツは、面白さが足りない        | 事前                  | 2.04 | 0.89 |       |       |
|              |                                 | 事後                  | 2.00 | 1.15 |       |       |
| 2-15         | 知的障がいは一つの個性である                  | 事前                  | 3.56 | 1.16 |       |       |
|              |                                 | 事後                  | 3.68 | 1.11 |       |       |

2. 障がい者福祉に対する認識と態度

保護者・ボランティアの障がい者福祉に対する認識と態度については、事前・事後アンケートでの回答結果に有意な差はみられなかった。

表 6. (対応のある t 検定) (n=25)

| 効果              | 質問番号                            | 質問項目                                  | 回答時  | 平均値  | 標準偏差 | 有意差 |
|-----------------|---------------------------------|---------------------------------------|------|------|------|-----|
| 障がい者福祉に対する認識と態度 | 3-1                             | 困っている知的障がいのある人がいれば、声をかけることができる        | 事前   | 4.28 | 0.84 |     |
|                 |                                 |                                       | 事後   | 4.32 | 0.69 |     |
|                 | 3-2                             | 困っている知的障がいのある人がいれば、なぜ困っているかを考えることができる | 事前   | 4.28 | 0.89 |     |
|                 |                                 |                                       | 事後   | 4.16 | 0.85 |     |
|                 | 3-3                             | 知的障がいのある人に頼み事をされたら力になることができる          | 事前   | 4.20 | 0.58 |     |
|                 |                                 |                                       | 事後   | 4.16 | 0.62 |     |
| 3-4             | 知的障がいのある人にスポーツを教えることができる        | 事前                                    | 3.28 | 1.14 |      |     |
|                 |                                 | 事後                                    | 3.44 | 1.16 |      |     |
| 3-5             | 自分に障がいがあってもスポーツをしたい             | 事前                                    | 4.40 | 0.91 |      |     |
|                 |                                 | 事後                                    | 4.12 | 1.13 |      |     |
| 3-6             | 自分に障がいがあったら、障がいのない人と一緒にスポーツをしたい | 事前                                    | 3.96 | 1.10 |      |     |
|                 |                                 | 事後                                    | 3.72 | 1.10 |      |     |

### 3-1 本事業の効果について（アンケート結果より）

#### 3. ボランティア参加による学習効果

保護者・ボランティアのボランティア参加による学習効果については、「人間的に成長することができた（できる）」「活動を通じて自分の興味関心が広がる（広がった）」「自分が探求していききたいテーマが見つかる（見つかった）」「今後地域の障がい者との活動に関わっていききたい」「自分には、地域の一員としてその地域の問題を解決する責任がある」において事前・事後アンケートでの回答結果に有意な差がみられた。

以上の項目について、「自分には、地域の一員としてその地域の問題を解決する責任がある」は、本事業を実施したことによりポジティブな変化がみられる。一方、「人間的に成長することができた（できる）」「活動を通じて自分の興味関心が広がる（広がった）」「自分が探求していききたいテーマが見つかる（見つかった）」「今後地域の障がい者との活動に関わっていききたい」は、事前アンケートにおける「期待」よりも、事後アンケートにおける「結果」が低くなっている。ただし、「結果」についても平均値は比較的高い数値を示している。この背景には、「期待」が高かったにもかかわらず、コロナ禍による活動制限や、実施回数の少なさ、実施期間の短さ等の影響があるとも考えられよう。

表 7.（対応のある t 検定）（n=25）

| 効果  | 質問番号                                    | 質問項目   | 回答時  | 平均値  | 標準偏差  | 有意差   |
|---|---|--|------|------|-------|-------|
| ボ<br>ラ<br>ン<br>テ<br>ィ<br>ア<br>参<br>加<br>に<br>よ<br>る<br>学<br>習<br>効<br>果 | 5-1                                     | これまでやったことがないことに挑戦する自信がつく                                   | 事前   | 4.24 | 0.93  |       |
|   |   | これまでやったことがないことに挑戦する自信がついた                                  | 事後   | 4.04 | 0.89  |       |
|   | 5-2                                     | 経験したことを、今後の学びに生かしていくつもりだ                                   | 事前   | 4.52 | 0.65  |       |
|   |   |  | 事後   | 4.40 | 0.76  |       |
|   | 5-3                                     | 人間的に成長することができる<br>人間的に成長することができた                           | 事前   | 4.40 | 0.76  | p<.01 |
|   |   |  | 事後   | 3.80 | 0.87  |       |
|   | 5-4                                     | 活動に参加して、経験から学ぶ楽しさに気づくことができる<br>活動に参加して、経験から学ぶ楽しさに気づくことができた | 事前   | 4.48 | 0.65  | p<.10 |
|   |   |  | 事後   | 4.12 | 0.97  |       |
|   | 5-5                                     | 経験を通して新しい知識を得ることができる<br>経験を通して新しい知識を得ることができた               | 事前   | 4.40 | 0.87  |       |
|   |   |  | 事後   | 4.12 | 1.01  |       |
|   | 5-6                                     | 活動を通じて自分の興味関心が広がる<br>活動を通じて自分の興味関心が広がった                    | 事前   | 4.36 | 0.70  | p<.05 |
|   |   |  | 事後   | 3.92 | 1.00  |       |
|   | 5-7                                     | 自分が探求していききたいテーマが見つかる<br>自分が探求していききたいテーマが見つかった              | 事前   | 3.52 | 1.12  | p<.05 |
| 事後  |   |  | 3.04 | 0.98 |       |       |
| 5-8   | 今後地域の障がい者との活動に関わっていききたい                 | 事前   | 4.28 | 0.74 | p<.01 |       |
|   |   | 事後   | 3.80 | 0.87 |       |       |
| 5-9   | 共生社会の形成に向けて、障がい者が暮らしやすい地域にしていけることが重要である | 事前   | 4.72 | 0.54 |       |       |
|   |   | 事後   | 4.76 | 0.44 |       |       |
| 5-10  | 共生社会の形成に向けて貢献できる                        | 事前   | 4.16 | 0.85 |       |       |
|   |   | 事後   | 4.08 | 0.76 |       |       |
| 5-11  | 積極的に地域に働きかけることで、その地域を少しでも変えることができる      | 事前   | 4.04 | 0.98 |       |       |
|   |   | 事後   | 4.12 | 0.73 |       |       |
| 5-12  | 自分には、地域の一員としてその地域の問題を解決する責任がある          | 事前   | 3.60 | 0.96 | p<.01 |       |
|   |   | 事後   | 4.08 | 0.76 |       |       |
| 5-13  | 今後地域の一員であることを意識しながら日常生活を送るつもりである        | 事前   | 4.12 | 0.78 |       |       |
|   |   | 事後   | 4.16 | 0.80 |       |       |

## 【調査結果のまとめ】

本事業の効果については、以下のようにまとめることができる。

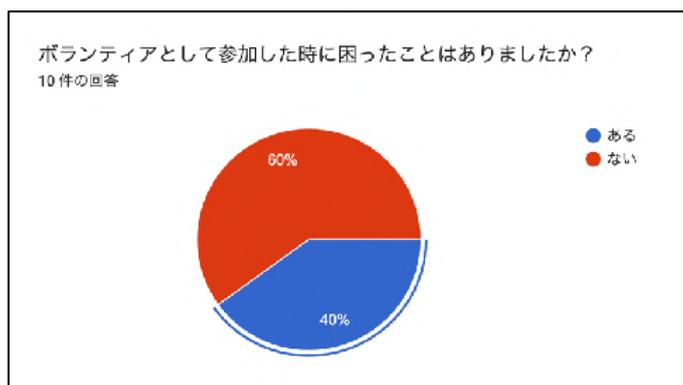
- ・ 参加者本人は社会的効果<心的・精神的効果<身体的効果の順に高い効果が得られたと認識している。
- ・ 参加者本人の、事業実施前の「期待」と実施後の「効果」には大きな差はみられない。
- ・ 保護者・ボランティアの本事業に対する「期待」は非常に高いものである。
- ・ 保護者・ボランティアの知的障がい者に対する認識は、いくつかの項目においてポジティブなものに変容した。
- ・ 保護者・ボランティアへの学習効果については、本事業に対する「期待」に対して「結果」が低いものとなっているが、「結果」についても比較的高い数値を示している。

以上の結果から、本事業については一定程度の効果が得られたと考えられる。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令により、学校周辺地域に事業への参加を促すことができず、在校生・OBOGに参加が限られてしまった点、実施回数の少なさや活動期間の短さ等、様々な制限をかけざるを得なかったことも少なからず影響を与えていると考えられる。したがって、今後は学校周辺地域の方々も巻き込みながら、本事業を継続することによって、更なる効果が得られると考えられる。

## 3-2 ボランティアマニュアル作成に向けたアンケート結果

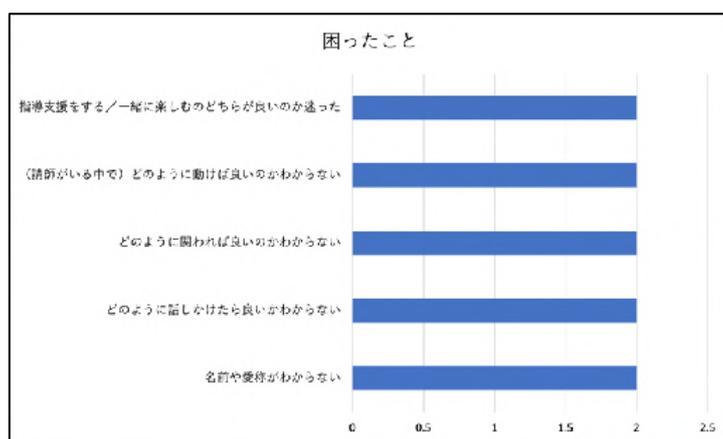
本事業の活動には、初めて知的障害のある方へ関わるボランティア、交流及び共同学習などで障害のある方との関わりを経験したボランティア、障害者スポーツ指導員資格を有するボランティアがいた。ボランティア登録 23 人のうち、10 人から回答があった。回答数が少なかったため単純集計した結果を記載する。

## 1. ボランティアとして参加した時に困ったことはありましたか？



10 人中、4 人がある、6 人がないと回答した。ないと回答したボランティアには、特別支援学校教員や、中級障害者スポーツ指導員、高校時代に交流及び共同学習で本校生徒と交流経験があり、障害科学の研究領域に大学進学した学生が含まれていた（連絡先は任意の入力のため、特定できない個人もいた）。

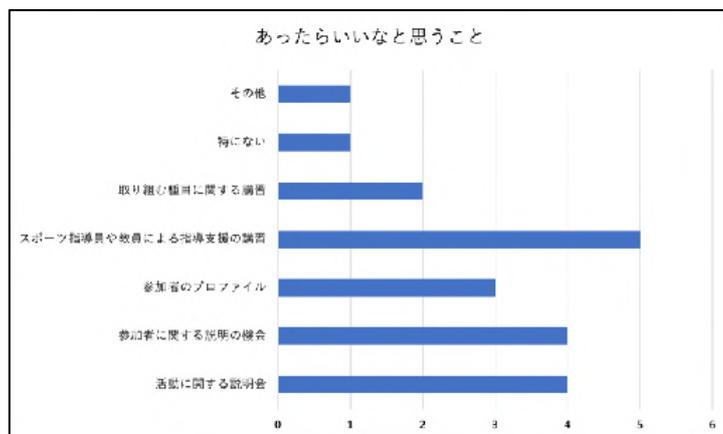
## 2. あるとお答えになった方にお尋ねします。困ったことはどの様なことですか？



ボランティアの参加方法については、有償の講師を招聘していた卓球クラブ、ドッジビークラブ（講師が指導、ボランティアは活動の支援）と、伴走ボランティアとしての役割依頼が大きかったランニングサークル（参加者とペア、または、グループで伴走。練習中や整理体操の指導・支援を含む）とで大きく異なるにも関わらず、事前の説明会を実施できていなかったこともあり、説明不足であったことが伺われた。

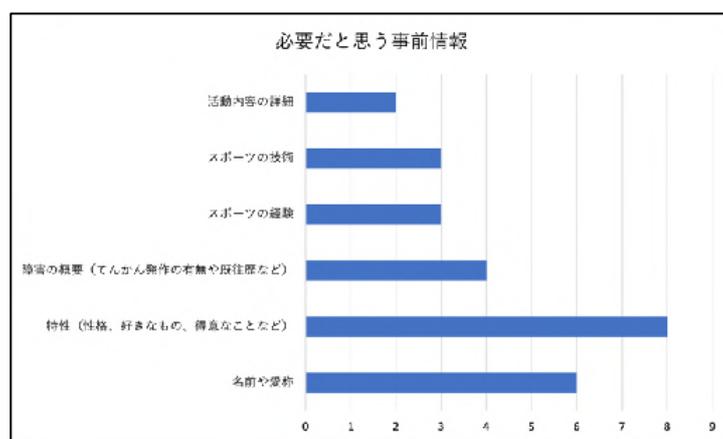
### 3-2 ボランティアマニュアル作成に向けたアンケート結果

3. ボランティアとして活動に参加する際、あったら良いなと思うことを教えてください（複数回答可）。



知的障害のある方々の特性や支援方法に関する基礎知識とともに、活動ごとの趣旨や目的、求める関わり方について丁寧に説明を行う機会、講習会の設定が必要であると思われた。

4. 今年度のプロジェクトに参加した際、必要だと思った情報について教えてください（複数回答可）。



ボランティアとしては、関わりを持つきっかけとなる情報、次に安全にスポーツ活動を行うための情報の順に欲していたことがわかった。

### 5. まとめ

次年度以降、活動を継続していくためには次のようなことが必要である。

- ・参加者のプロフィール（名前、愛称、得意なことや好きなこと、スポーツを行うにあたって必要な医療情報）作成と説明会の実施。
- ・知的障害者全般に対する知識、指導支援にあたる際のポイントなどをまとめたマニュアル提供と、講習会の実施。

### 3. 成果と課題

#### 1. 成果

##### 1) 定期開催による、参加者・ボランティアの増加

9月に活動を開始して以来、徐々に参加者登録（全体、活動別ともに）、ボランティア登録の人数を増やし、のべ264人の参加者、299人の保護者・ボランティアの参加があった。新たな参加登録者は、参加者からの体験談を聞き興味を持った方、1つの活動に参加した際に味わった充実感から別の活動にも参加してみようという気持ちを持った方がいた。いずれにせよ、月1回の定期開催を行うことで改善を加え、徐々に充実した活動を提供できたことの現れであると考ええる。

また、ボランティアは直接の勧誘者のみであったスタート時から、本校、文京区社会福祉協議会、障害者スポーツ指導者協議会などのHPに掲載した情報をもとに集まった方が加わることで人数の増加につながった。

##### 2) ボランティア参加（障害のある方と関わる機会を持つこと）による意識変化

ボランティアに参加した方の参加理由を見てみると、スポーツへの興味関心に加え、交流及び共同学習で障害のある方々に関わった経験を理由に挙げている者が見られた。また、今回の経験をきっかけに進路を変更し、障害のある方々に関わる領域を目指すようになった高校生ボランティアがいた。卓球クラブの指導で初めて障害のある方と関わる経験を持った大学生コーチへの聞き取りからは「もっと沢山の人が障がいを持っている方と交流するべきだと思う。どうしたら伝わるかを感じ取ることができたと同時に、障がいを持っている方が何を求めているかわからなかったので、分かってほしいという思いを持った。」

「改めて人に伝えることの難しさを実感できた。この経験を今後に生かしていきたい。」「参加者が楽しく取り組む姿を見て、自分もモチベーションを高く持とうとする変化があった。」などの障害のある方々へのポジティブな感想がみられた。

アンケート分析から、コロナ禍における活動の制限により、事前の期待値の高さに事後の結果が応えきれなかった部分があることが示唆されたが、課題に対処しながらこのような事業を継続していくことは、共生社会を創出する人材育成のために意義があると考ええる。

##### 3) オンラインスポーツ教室の実施

コロナ禍の活動制限の中、ドッジビークラブのオンライン教室を実施した。今後の活動につながると思われる内容（ドッジビー体操、準備運動、ディスクの取り扱い練習）を30分ほどの時間で実施した。参加者からの感想では、「みんなとおどれて、とても楽しかったです。またやってみてみたいと思っています。」

「とても分かりやすく、低学年の方にとっても時間・内容ともに良かった。」「はじめは狭い家の中でどうなることかと心配していましたが、十分楽しむことができました。」「終了した後も、少し練習しました。運動不足の体にストレッチが心地よかったです。」などの意見をいただくことができた。内容を吟味することで、継続して取り組んでいけることが分かった。

## 2. 課題

### 1) 継続的なボランティアの確保と育成

大学ボランティアセンターなどからの組織的な派遣は難しかったが、事業開始から終了まで少しずつではあったが、個人参加のボランティアを増やすことができた。また、単発ではあったが、文京区内のボランティア活動に積極的に取り組んでいる私立高校と連携し、ボランティア活動の場を提供することができた。どちらも、HPなどで発信した情報をもとに実現した。継続的にボランティアを確保する意味で、大学や、大学内のボランティアサークルなどと連携をしていくことは非常に有効な手段だと考えるが、コロナ禍での実現は難しいと思われる。有効な打開策を見いだすことが難しい継続の課題である。次年度は、定期的な報告の更新を行うなどより充実した情報発信をすることでボランティアを確保することを目指したい。

また、3-2に示したボランティアへの聞き取りや、障害者スポーツ指導員の資格を有するボランティアからの指摘などにより今後整備が必要なことも明らかになった。

- ・ ボランティア同士の情報交換や、学び合いを可能にするボランティア会（ボランティア部会）の設立
- ・ ボランティア会の規約（参加するにあたっての心得だけでなく、事故や傷害発生時の）の作成
- ・ 安全に、楽しく、スポーツに取り組む際に必要な参加者の情報をまとめたプロフィールの作成と管理
- ・ 知的障害のある方々の特性や、特性に応じた指導支援のポイントをまとめたマニュアルの作成
- ・ 上記3つに関する説明会、講習会、定期的な情報交換会の実施

障害のある方との関わりの経験があるボランティアもいれば、初めて障害のある方に接するボランティアもいる。経験と知識を活かし今後リーダーとして活躍していく人材の育成、活動を通じて充実感・達成感を味わい、継続して参加する人材の発掘と育成も重要である。加えて、安全な運営を進めること、スタッフの一人として責任感とやりがいを持って参加できる場とすること、ボランティア同士の交流を深め、学び合う場・やりがいや悩みを共有する場を作ることが必要と考える。今後は、ボランティア部会設立を目指すと共に、活動に参加する際の規約作り、必要な知識・技術を取得するための研修会開催、情報交換会のなど実施に取り組んでいきたい。

### 2) 参加者主体の運営の実現

今年度は、準備期間が短かったことや、経験・知識不足から学校が中心となった運営にならざるを得なかった。今後数年をかけて、ボランティア部会の設立、参加者（在校生・卒業生の保護者、ボランティア、障害当事者本人）が積極的に運営に関わっていく組織づくりと意識改革に取り組んでいきたい。特定の誰かに頼らない、参加者全員で創り上げる組織と活動を実現することが、持続可能な組織づくり、活動づくりにつながっていくと考える。

## 卷末資料





3) 運動の機会としてちょうどいい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) スポーツの技術面が向上する \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3. あなたはプログラムとの関係を通じた以下の項目について、どのようにお考えですか？

1: そう思わない、2: どちらかといえばそう思わない、3: どちらでもない、4: どちらかといえばそう思う、5: そう思うの5段階でお答えください。

1) プログラムのある日が楽しみだ \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) 多くの仲間ができると思う、作りたい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 自分への自信を高めたい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 頑張る目標を作りたい、持ちたい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 心の健康に役立つと思う \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) 家族関係が良くなると思う \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

7) 今の自分は健康だと思う \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4. あなたはプログラムに参加することの効果について、どのようにお考えですか？

1: そう思わない、2: どちらかといえばそう思わない、3: どちらでもない、4: どちらかといえばそう思う、5: そう思うの5段階でお答えください。

1) (スポーツ以外の)日常生活上の動作が高まる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) (スポーツ以外の)日常生活の質が高まる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 仕事や学校などに前向きに取り組めるようになる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 衝動性や攻撃性などが低減される \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 集団行動ができるようになる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) コミュニケーション能力が向上する \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

7) スポーツへの関心が高まる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

8) 地域社会とのつながりが増える \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5. その他、プロジェクトに対する思いやお考えがあればご記入ください(自由記述)。

回答を入力

以上になります。ご協力ありがとうございました。

-MEMO-



1) 参加することで身体的な健康に役立つ \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) 体力面の向上につながる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 運動の機会としてちょうどいい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) スポーツの技術面が向上する \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3. あなたはプログラムとの関係を通じた以下の項目について、どのようにお考えですか？

1: そう思わない、2: どちらかといえばそう思わない、3: どちらでもない、4: どちらかといえばそう思う、5: そう思うの5段階でお答えください。

1) プログラムのある日が楽しみだ \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) 多くの仲間ができた。 \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 自分への自信が高まった。 \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 頑張る目標ができた、持てた。 \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 心の健康に役立った。 \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) 家族関係が良くなった。 \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

7) 今の自分は健康だと思う \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4. あなたはプログラムに参加したことの効果について、どのようにお考えですか？

1: そう思わない、2: どちらかといえばそう思わない、3: どちらでもない、4: どちらかといえばそう思う、5: そう思うの5段階でお答えください。

1) (スポーツ以外の)日常生活上の動作が高まった。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) (スポーツ以外の)日常生活の質が高まった。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 仕事や学校などに前向きに取り組めるようになった。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 衝動性や攻撃性などが低減された。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 集団行動ができるようになった。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

8) 地域社会とのつながりが増えた。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5. その他、プロジェクトに対する思いやお考えがあればご記入ください(自由記述)。

回答を入力

6. 次年度の活動について

現時点での希望や、思いを教えてください。

次年度も継続して活動を行いたいと思いますか \*

( ) 続けたい ( ) 続けたくない

( ) その他:

【

】

7. 活動を続けたいとお答えになった方に質問します。

助成金が得られなかった場合、今の活動を維持するには運営資金が必要です。

( ) 有料でも参加したい ( ) 有料であれば参加しない

8. 有料でも参加したいとお答えになった方に質問します。

継続したい活動は何ですか？ \* 複数選択可 \*

ランニングサークル

ドッジビークラブ

卓球クラブ

その他:

【  
】

以上になります。ご協力ありがとうございました。



5) 様々な面で差別を受けている \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) スポーツのルールを理解することができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

7) できるスポーツが限られている \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

8) スポーツの技術を向上させることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

9) スポーツを行うことは危険だ \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

10) 大勢の仲間と楽しむことができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

11) 障がいのない人とは別々にスポーツをした方がよい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

12) 障がいのない人と一緒に学校で学んだり、働いたりすることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

13) スポーツを行うことは生活の中で重要だ \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

14) 知的障がいのある人のスポーツは、面白さが足りない \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

15) 知的障がいは一つの個性である \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3. あなたは以下の項目について、どのようにお考えですか？

1: そう思わない、2: どちらかといえばそう思わない、3: どちらでもない、4: どちらかといえばそう思う、5: そう思うの5段階でお答えください。

1) 困っている知的障がいのある人がいれば、声をかけることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) 困っている知的障がいのある人がいれば、なぜ困っているかを考えることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 知的障がいのある人に頼み事をされたら力になることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 知的障がいのある人にスポーツを教えることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 自分に障がいがあってもスポーツをしたい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) 自分に障がいがあったら、障がいのない人と一緒にスポーツをしたい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4. あなたは、障がいのある人の困りごとを解決するためにはどのようなことが必要だと思いますか。以下の項目から重要だと思う順に3つ選択してください。

1) 1番目に重要だと思うもの \*

- 医学的治療やリハビリテーションによる身体機能の回復
- 周囲の手助けや声かけ
- 車いすや義手、義足、補聴器、白杖などの障がいのある人が使用する用具の開発
- スロープや点字ブロック、音声ガイドなどのバリアフリーの充実
- 障がいのある人自身の、障がい乗り越えるための強い意志と努力
- 障がい者割引などの障がいのある人を優遇する制度
- その他:【 \_\_\_\_\_ 】

2) 2番目に重要だと思うもの \*

- 医学的治療やリハビリテーションによる身体機能の回復
- 周囲の手助けや声かけ
- 車いすや義手、義足、補聴器、白杖などの障がいのある人が使用する用具の開発
- スロープや点字ブロック、音声ガイドなどのバリアフリーの充実
- 障がいのある人自身の、障がい乗り越えるための強い意志と努力
- 障がい者割引などの障がいのある人を優遇する制度
- その他:【 \_\_\_\_\_ 】

3) 3番目に重要だと思うもの \*

- 医学的治療やリハビリテーションによる身体機能の回復
- 周囲の手助けや声かけ
- 車いすや義手、義足、補聴器、白杖などの障がいのある人が使用する用具の開発
- スロープや点字ブロック、音声ガイドなどのバリアフリーの充実
- 障がいのある人自身の、障がい乗り越えるための強い意志と努力
- 障がい者割引などの障がいのある人を優遇する制度
- その他:【 \_\_\_\_\_ 】

5. あなたが本プロジェクトを通じて学んだり、成長したりできると思うことを教えて下さい。

1) これまでやったことがないことに挑戦する自信がつく。 \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) 経験したことを、今後の学びに生かしていくつもりだ。 \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 人間的に成長することができる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 活動に参加して、経験から学ぶ楽しさに気づくことができる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 経験を通して新しい知識を得ることができる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) 活動を通じて自分の興味関心が広がる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

7) 自分が探求していきたいテーマが見つかる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

8) 今後地域の障害者との活動に関わっていきたい。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

9) 共生社会の形成に向けて、障害者が暮らしやすい地域にしていくことが重要である。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

10) 共生社会の形成に向けて貢献できる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

11) 積極的に地域に働きかけることで、その地域を少しでも変えることができる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

12) 自分には、地域の一員としてその地域の問題を解決する責任がある。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

13) 今後地域の一員であることを意識しながら日常生活を送るつもりである。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

その他、プロジェクトに対する思いやお考えがあればご記入ください(自由記述)。

以上になります。ご協力ありがとうございました。



2) 身の回りのことを自分ですることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 家族が世話をするのがよい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 家族以外の人と接する機会を持つのがよい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 様々な面で差別を受けている \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) スポーツのルールを理解することができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

7) できるスポーツが限られている \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

8) スポーツの技術を向上させることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

9) スポーツを行うことは危険だ \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

10) 大勢の仲間と楽しむことができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

11) 障がいのない人とは別々にスポーツをした方がよい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

12) 障がいのない人と一緒に学校で学んだり、働いたりすることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

13) スポーツを行うことは生活の中で重要だ \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

14) 知的障がいのある人のスポーツは、面白さが足りない \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

15) 知的障がいは一つの個性である \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3. あなたは以下の項目について、どのようにお考えですか？

1: そう思わない、2: どちらかといえばそう思わない、3: どちらでもない、4: どちらかといえばそう思う、5: そう思うの5段階でお答えください。

1) 困っている知的障がいのある人がいれば、声をかけることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) 困っている知的障がいのある人がいれば、なぜ困っているかを考えることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 知的障がいのある人に頼み事をされたら力になることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 知的障がいのある人にスポーツを教えることができる \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 自分に障がいがあってもスポーツをしたい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) 自分に障がいがあったら、障がいのない人と一緒にスポーツをしたい \*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4. あなたは、障がいのある人の困りごとを解決するためにはどのようなことが必要だと思いますか。以下の項目から重要だと思う順に3つ選択してください。

1) 1番目に重要だと思うもの \*

( ) 医学的治療やリハビリテーションによる身体機能の回復

( ) 周囲の手助けや声かけ

( ) 車いすや義手、義足、補聴器、白杖などの障がいのある人が使用する用具の開発

( ) スロープや点字ブロック、音声ガイドなどのバリアフリーの充実

( ) 障がいのある人自身の、障がいを乗り越えるための強い意志と努力

( ) 障がい者割引などの障がいのある人を優遇する制度

( ) その他:【

】

2) 2番目に重要だと思うもの \*

- 医学的治療やリハビリテーションによる身体機能の回復
- 周囲の手助けや声かけ
- 車いすや義手、義足、補聴器、白杖などの障がいのある人が使用する用具の開発
- スロープや点字ブロック、音声ガイドなどのバリアフリーの充実
- 障がいのある人自身の、障がいを乗り越えるための強い意志と努力
- 障がい者割引などの障がいのある人を優遇する制度
- その他:【 】

3) 3番目に重要だと思うもの \*

- 医学的治療やリハビリテーションによる身体機能の回復
- 周囲の手助けや声かけ
- 車いすや義手、義足、補聴器、白杖などの障がいのある人が使用する用具の開発
- スロープや点字ブロック、音声ガイドなどのバリアフリーの充実
- 障がいのある人自身の、障がいを乗り越えるための強い意志と努力
- 障がい者割引などの障がいのある人を優遇する制度
- その他:【 】

5. あなたが本プロジェクトを通じて学んだと思うこと、成長したと思うことを教えて下さい。

1) これまでやったことがないことに挑戦する自信がついた。 \*

- 1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

2) 経験したことを、今後の学びに活かしていくつもりだ。 \*

- 1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

3) 人間的に成長することができた。 \*

- 1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

4) 活動に参加して、経験から学ぶ楽しさに気づくことができた。 \*

- 1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

5) 経験を通して新しい知識を得ることができた。 \*

- 1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

6) 活動を通じて自分の興味関心が広がった。 \*

- 1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

7) 自分が探求していきたいテーマが見つかった。 \*

- 1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

8) 今後地域の障がい者との活動に関わっていきたい。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

9) 共生社会の形成に向けて、障がい者が暮らしやすい地域にしていくことが重要である。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

10) 共生社会の形成に向けて貢献できる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

11) 積極的に地域に働きかけることで、その地域を少しでも変えることができる。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

12) 自分には、地域の一員としてその地域の問題を解決する責任がある。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

13) 今後地域の一員であることを意識しながら日常生活を送るつもりである。\*

1: そう思わない 2: どちらかといえばそう思わない 3: どちらでもない 4: どちらかといえばそう思う 5: そう思う

その他、プロジェクトに対する思いやお考えがあればご記入ください(自由記述)。





## ● ドッジビー協会の活動 ●

★目指すこと(構想 / 目標 / ビジョン)

### ①【スポーツに親しむ人】を増やす。

⇒ 基本的に年齢性別は不問ですが理念背景を鑑み、子どもを中心とします。

### ②【スポーツに親しむ機会】を増やす。

⇒ 地域性を尊重し、おこないやすい時間、場所、状況を考慮します。

### ★具体的な活動(方策 / 業務 / ミッション)

エリア : 行動の範囲として、まずは県の境【地域密着】を中心軸に据えます。

講座 : あらゆるスポーツに通じる遊びの延長にある【講習メニュー】を採用します。

競技 : 既存施設・設備の利用を念頭に【おこないやすい環境】を研究・開発します。

大会 : 地域密着型の大会支援と【情報の共有】を推進します。

用具 : 【いつでも、どこでも、入手できる体制】づくり、Web通販を実施します。

船橋 : 傘下協会を拡充する際は【市町村レベルを第一義】に位置付けます。

その他 : 大会表彰グッズなど高価用品を提供し、【楽しい思い出となる仕組み】を提案します。

【押し付けることなく】フライングディスクのおもしろさ、可能性を紹介します。

【モチベーション維持】を図ることを目的とした【大会を開催】します。

指導 : 基礎指導は

- ・各地域において
- ・できるだけ統一した内容に(近隣との交流をスムーズにするため)
- ・そのために指導者資格制度を導入しています。

## —— ドッジビー競技の指針 ——

### 指針(1) 一般認知として

通常、ドッジボールはドッジと表記しますが  
<ドッジビーは「ドッジ」>あって、「<sup>ball</sup>ズ」としています。

**【ドッジと言えば = ディスク】の一般認知を目指します。**

### 指針(2) スポーツ種目として

誘われて(すぐに)やれるスポーツ

誘いややすいスポーツ

No1を目指します。

## —— ドッジビーのスローガン ——

協会の理念および目標や業務を

統一認識として理解する「ひと言」

年齢・性別

さらに学歴、国籍や肌の色を問わず、

**すべてのヒトに「笑顔」を！**  
**“DODGEBEE”**

**「 Smile for All 」**

## — ドッチビーの指導コンセプト —

### ①あなたが現在、住んでいる地元において

まずは、「家族」みんなで同じスポーツをやってみませんか？  
これ、実は難しいですか？ドッチビーならできますよ。と伝えたいのです。

つぎに、「隣人」を誘ってみてください。

近隣、町内レベルの交流を促進して住みやすい街づくりをしてみませんか？

さらには、少し広げて「地元」で。

交流の枠を市区町村や都道府県のレベルに拡張してくださると嬉しく思います。

最後に、「地球」の一員たる心身として環境持続への配慮をしましょう！

## ♥ コンセプト・シンボルマーク ♥

冊子(2)にある スローガン

## 「Smile for All」

と

指導コンセプトの想定対象である

♥ 家族 ♥ 隣人 ♥ 地元 ♥ 地球

を表現した4つのハートで

構成されたシンボルマークを制定。

### ②子どもたちを中心に

●ドッチビーを通じて子どもたちに伝えていただきたいことは

- 1：礼と節 監督・コーチ/相手チーム/審判員/そして仲間に対して
- 2：服さず スポーツマンシップ、モラル、プレースタイル全般に
- 3：仲間 仲間と一緒に、目標に向かうことの喜びを
- 4：覚える 勝てば楽しい。そのためにはルールを知り、考える

また、子ども以外に対しても性別や年齢の垣根を超えて同じスポーツを

同じフィールドでおこなう【触れ合いの場】を創り、コーディネートしてください。

### ③指導者は「カッコいい」おとなに！

「カッコいい」とは容姿ではなく、その「志向や姿勢」さらには「行動」であり、  
すこくではなく、「ちよつと」で良いと考えています。

「チョイワル」というコトバが一時的流行りましたが、チョットいい感じ  
→「チョイ良し」であってほしいのです。

【なぜか??】 子どもたちは理解ではなく、肌で感じていると思うのです。  
子どもたちが「キチンと話を聞くべきおとな」であってほしいのです！

これを指導者・審判員資格のあらゆるグッズにおいて具象化することで  
常に、この意圖を持っていただきたいと思います。





## 障がい者フライングディスクの概要

1965年より毎年開催されている「全国障害者スポーツ大会」では、フライングディスクが正式競技として採用されています。フライングディスクは1940年代後半にアメリカのイエール大学の学生がfrisbee・パイ・カンパニーのパイ皿を投げて遊んだことから始まったと言われていています。現在、世界フライングディスク連盟公認の種目は11種目（日本協会公認種目であるドッチビーを含めると12種目）存在し、プレーヤーの体力や年齢、競技志向などに応じて様々な種目を選択することができます。障がいのある人のフライングディスクもアメリカ発祥で、1968年に知的障がいのある人のスポーツプログラム「スペシャルオリンピックス」第1回大会で正式競技として採用されています（現在、スペシャルオリンピックスでのフライングディスク競技は、日本のスペシャルオリンピックスのみ実施されています）。

日本における障がいのある人のフライングディスク競技は、従来「ゆうあいピック」（全国知的障害者スポーツ大会）の正式競技として行われてきましたが、2001年より「全国身体障害者スポーツ大会」と「ゆうあいピック」が統合され、「全国障害者スポーツ大会」の正式競技として行われるようになりました。フライングディスクは、障がいの程度に関わらず、障がいのある人すべてが同じ条件で競技する唯一の競技です。種目は、スローの正確性を競うアキュラシー（ディスリート・ファイブ、ディスリート・セブン）とスローの飛距離を競うディスタンスの2種類です。アキュラシーでは、障がい区分や男女の区別はなく、ディスタンスでは、男女別に立位と座位に分けて競技を行います。障がい者スポーツ特有の障がい区分を極力減らし、日頃から障がいのない人も含めたすべての人が楽しめる競技とすることを目標としています。

### 【アキュラシー】

種 目： ディスリート・ファイブ（ゴールまでの距離5m）  
 ディスリート・セブン（ゴールまでの距離7m）  
 使用 ディスク： ファストバックモデル（直径23.5cm、重量100±5g）  
 アキュラシーゴール： 直径91.5cm（高さ61cm）  
 試 技： 5分以内に10投

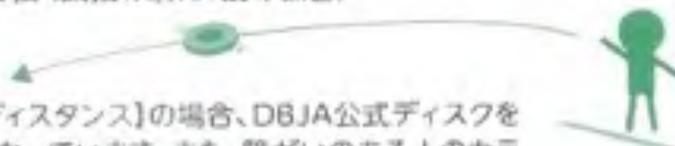
\*視覚障がいのある選手の場合、競技役員がアキュラシーゴール後方3mの距離から電子音によってゴールの中心部を知らせることができます。



### 【ディスタンス】

使用 ディスク： ファストバックモデル（直径23.5cm、重量100±5g）  
 試 技： 3分以内に3投（試技の前に1投の練習）

\*DBJA公式競技である【ドッチディスタンス】の場合、DBJA公式ディスクを使用し、試技は1分以内に3投となっています。また、障がいのある人のカテゴリーとして、チャレンジドカテゴリーを設置しています。



## 1. 使用ディスク例と特性

- ① ドゥッヂビー： 学校がすでに備品として保有している可能性が高い。スポーツ用品店でも販売しているため入手が簡単。当たっても痛くない安全性。
- ② ファーストバック： 障がい者フライングディスクの公式ディスク。初心者でも正しい握り方（グリップ）になりやすい形状。
- ③ フルトラスター： アルティメットの公式ディスク。きちんと投げることができれば飛距離が  
 であるなど、ハイパフォーマンスなディスク。

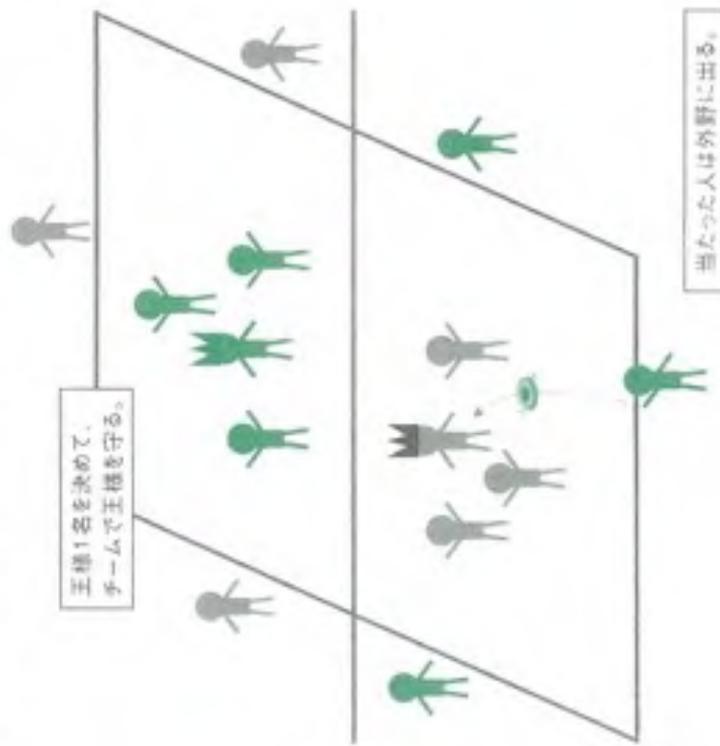


## 2. 指導事例

OBJAは障がいのある人にとって最適なフライングディスクの指導方法を求めるために、障がい者ディスクプレイヤーで特別支援学校において教壇に立つ方にアンケート調査を行い、これまでの経験でディスクを使った授業例や、指導のポイント等の情報を整理しています。以下ではアンケートから得られた指導事例や教員の感想をいくつかご紹介したいと思います。

### 指導事例1： 玉様ディスクドッジ

ディスクドッジとフィールドやゲームの進行方向は同じですが、内野プレイヤーのうち1人がゲーム開始前に玉様となり、その人に当てた方のチームが勝利となる変則ルールゲームです。相手チームの玉様は事前にはわからず、審判と相手のみが知っています。通常のルールとは違うディスクドッジを行うことで、チーム内の協力が見られます。一度に多くの人数で行うことができ、運動量も確保することができます。



指導事例2: ディスクゴルフ

ディスクキャッチャーなどで目標を決め、目標までに何回や何回できるかを競うゲームです。ディスクキャッチャーがない場合は、果敢用バケツや大きなダンボールなどで代用することも可能です。活動エリアが広く、運動量を確保することができます。活動エリアが狭い場合は、自由しなげられないポイントを決めることで、難易度を上げることができます。また、目標がわかりやすいため、達成感が得られやすいです。



指導事例3: サッカーなどのゴールへのシュート

サッカーゴールやハンドボールゴールなど、大きな目標物に引いて、1投で距離のあるスローカーブスローを投げ入れるゲームです。まずは指導者がデモンストラーションで距離のあるスローカーブスローを投げ入れることにより、参加者の興味や関心を高めやすくなります。



- ・指導をしてよかったこと
- ・子どもの笑顔を見ることができた
- ・子どもの声援につながった
- ・ディスクに対する興味・関心が高い
- ・全参加者スポーツ大会フライングディスク競技への出場につながった
- ・指導の陣に難しかったこと
- ・ディスクを投げること(遠くまでディスクをまから投ずるといふ行為が難しい人もいる)
- ・ルールの理解(ディスクの投げ、「どうなったら勝ちなのか」「誰に出てるのか」)
- ・「当たったらどうするの?」などのルールを覚えるのに時間がかかった
- ・参加者の理解による配慮(参加者の理解は人によってバラバラなのでその人にあった指導が求められる)
- ・参加者の理解や経験レベルによって指導時間やコートのおよびを工夫する必要がある

3. 参加したいある人へのフライングディスク指導のポイント

本節では、参加したいある人に対しポイントの指導をする際に考慮すべきポイントと、フライングディスクを通して考慮してあげたいことをご紹介します。

まずは「参加者を知る」ということです。具体的に、

1. 安全確保への配慮: 参加したい人も、参加していない人にも怪我があるのと同時に、様々な種類の参加したいや程度によって異なる身体・精神状態がみられます。スポーツ活動を行う際にも同様に同様の配慮となるのが、活動をする人の安全を確保することになります(参加者の参加したいはどのようなものか、自身で体感レベルはどの程度か、自身の意思をどのくらい表示することができるのか、など)。
2. 活動経験: 参加したいのない人が初めてスポーツを行う際も、指導者や先輩は参加者のスポーツ経験を知り、その人の経験に応じて指導をしています。この点は、参加したいの経験に合わせることが重要です。参加者との自然なコミュニケーションの中で活動経験を引き出すことが会話の機会にもなるためです(参加者は日頃スポーツを行っているのか、フライングディスクの経験はあるのか、どのディスクを使っているのか、など)。
3. 興味・関心(参加者のスポーツに対する興味・関心はあるのか、どのディスク種目に興味・関心があるのか、など)。

次に「わかるための工夫」をするということですが、具体的には、

1. 短い言葉での指示: 一度にたくさんすることを説明すると混乱してしまうことがあります。短い言葉ですべては大切なことだけを説明するようにするとわかりやすくなります。
2. 明確な指示: 「例を大きく挙げましょう」といったような説明は効果的です。「私が思った通り大きく動かしてみよう」というような具体的な身体の動作を用いて説明するとわかりやすくなります。
3. 目でわかる指示: その日の活動内容などを書き記したり、録音や写真を用いると参加したいがわかりやすくなります。また、動画を用いることも効果的です。さらに、参加したいの動作は動きを分解して示したり、見せる角度を変えるなどの工夫をするとうかりやすくなります。他にも全ての人かわかりやすいような工夫は、考えれば考えれば出てくると思います。様々な取組を試験することで身につく能力はありますので、積極的に試行錯誤に出ていることが望ましいです。現場での経験を身につけて、参加者に即した工夫を凝らしていきましょう。

よつめに「できるための工夫」をすることです。参加者は「できない」と感じることも、その種目やスポーツのことを嫌いになっってしまうこともあります。達成感を感じさせながらスポーツを楽しむために、スモールステップでの指導が望ましいでしょう。具体的には、いざなりディスクタワーの投げを教えるのではなく、まずは近くからディスクを投げたいに当ててみることを目標にする。次に同じ距離からディスクを投げたいを教える。目標には達成感を感じるように教えること。また、個人差も取り扱います。最初は投げやすいディスクを用い、徐々に投げにくいディスクを用いるようにする。用具のアプローチも効果的です。そのほか、投げたいの工夫としては、課題用向盤アプローチやアキモウシージャケット、ディスクキャッチャーなどの目標に向かって投げたいを教える。その目標に向かって投げたいによって効果的なフォームや力加減を教える。結果的にキャッチ＆スローもできるような工夫です。参加者によって逆の方向があるということもあつていいです。

その後「達成感や達成感」をすることです。参加者を知ったり、わかるための工夫をし、様々な準備をしたとしても、実際の指導現場になると予想していたことがあつたことがあつたこともあつたりします。何も知らないうちに準備することがあつたこと、それだけ準備をしたとしても、予想しなかったことはあつてしまいます。このように、参加者の対応能力はどれだけの理解を構築してきたかによって変わります。その場で参加者のことを考え、「どのようにすれば楽しんでもらえるか」「参加者や指導者が求めていることは何か」などを考え、臨機応変に調整を持って指導することが大切です。



#### 4. Unified Flyingdisc Session

協会理念、指導者心得を実践する場として、日頃の協会活動がありますが、現在のところ、残念ながら障がいのある人が実際に参加している場は一つもありません。

そこで、今までスポーツやドッジビーを行ったことのない人、誰もが今まで以上に参加しやすいスポーツ環境を提供することが重要であるとDBJAは考え、Unified Flyingdisc Sessionを実践します。

Unified Flyingdisc Sessionは、障がいのある人のみならず、より多くの人にドッジビーに興味を持っていただく、日常生活の中で楽しむことのできる遊び方や種目を創造し、実践することを目的とした活動です。

また、使用するディスクはドッジビーに限らず、その人にあった様々なディスクを使用することを大切にします。

以上の理由から、Unified "DODGEBEE" SessionではなくUnified "Flyingdisc" Sessionとしています。

今後、Unified Flyingdisc Sessionをできるだけ数多く、シリーズ化して開催し続けることによつて

(1)DBJAと関係者における「ノウハウ」の蓄積

(2)障がい者スポーツ分野における「人脈」の構築

(3)パッケージング化による実務コンテンツの適正評価とより良い取組選択

を進めたいと考えています。さらに、DBJA公式4種目において、障がいのある人とない人が一緒にチームを組んで参加するUnified大会を開催すること、並びにDBJA主催大会において「障がい者部門」は存在せず、当たり前のよう障がいのある選手が参加していることを協会の目標とします。

次に、DBJAが実施するUnified Flyingdisc Sessionのカリキュラム例(DODGEBEE チャレンジサーキット)を紹介いたします。

これは2時間を想定したカリキュラムであり、時間や場所、人数、参加者などを考慮し、運営内容を変更することが望ましいです。また、得点シートにはシートを用いるなどの工夫をしても効果的でしょう。様々な工夫を凝らし、みんながドッジビーを楽しみましょう!

#### Unified Flyingdisc Session カリキュラム

日時 / 18時～ 19時15分  
 場所 / 3F02 (3F01A～3F01C) / 1階(3F01A) / 1階(3F01B) / 1階(3F01C)  
 人数 / 20～30名 (14歳～19歳)  
 費用 / 参加費0円(参加費 0円) / 1人100円



| 時間    | 内容   | 準備・整頓  | 担当・備考  |
|-------|--|--|--|
| 00:30 | ●参加者集合・受付  | 受付   | 受付終了後は参加者3F～4Fまで巡回監視<br>2F3F02(3F01A)                |
| 01:00 | ●参加者集合完了   | 参加者集合完了の連絡   | 00:30～01:00  |
| 01:00 | 01:00～01:15<br>01:15～01:30<br>01:30～01:45<br>01:45～02:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 02:00 | 02:00～02:15<br>02:15～02:30<br>02:30～02:45<br>02:45～03:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 03:00 | 03:00～03:15<br>03:15～03:30<br>03:30～03:45<br>03:45～04:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 04:00 | 04:00～04:15<br>04:15～04:30<br>04:30～04:45<br>04:45～05:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 05:00 | 05:00～05:15<br>05:15～05:30<br>05:30～05:45<br>05:45～06:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 06:00 | 06:00～06:15<br>06:15～06:30<br>06:30～06:45<br>06:45～07:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 07:00 | 07:00～07:15<br>07:15～07:30<br>07:30～07:45<br>07:45～08:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 08:00 | 08:00～08:15<br>08:15～08:30<br>08:30～08:45<br>08:45～09:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 09:00 | 09:00～09:15<br>09:15～09:30<br>09:30～09:45<br>09:45～10:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 10:00 | 10:00～10:15<br>10:15～10:30<br>10:30～10:45<br>10:45～11:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 11:00 | 11:00～11:15<br>11:15～11:30<br>11:30～11:45<br>11:45～12:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 12:00 | 12:00～12:15<br>12:15～12:30<br>12:30～12:45<br>12:45～13:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 13:00 | 13:00～13:15<br>13:15～13:30<br>13:30～13:45<br>13:45～14:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 14:00 | 14:00～14:15<br>14:15～14:30<br>14:30～14:45<br>14:45～15:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 15:00 | 15:00～15:15<br>15:15～15:30<br>15:30～15:45<br>15:45～16:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 16:00 | 16:00～16:15<br>16:15～16:30<br>16:30～16:45<br>16:45～17:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 17:00 | 17:00～17:15<br>17:15～17:30<br>17:30～17:45<br>17:45～18:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 18:00 | 18:00～18:15<br>18:15～18:30<br>18:30～18:45<br>18:45～19:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 19:00 | 19:00～19:15<br>19:15～19:30<br>19:30～19:45<br>19:45～20:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |
| 20:00 | 20:00～20:15<br>20:15～20:30<br>20:30～20:45<br>20:45～21:00 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 | 1. 参加者への説明<br>2. 参加者への説明<br>3. 参加者への説明<br>4. 参加者への説明 |

ドッジビーチャレンジサーキットで使用するパネルをはじめ、グラフィック類は全てMUDを用いています。  
 MUDとはMedia Universal Designの略でさまざまな情報が高齢者・障がいのある人・色覚障がいのある人、外国人などにも、見やすく、伝わりやすくするために配慮する手法です。  
 内閣府認証NPO法人MUD協会による特定資格(メディア・ユニバーサルデザイン3級 アドバイザー)を有する人物に発注し、作成しました。



●得点シートについて  
 ・得点記入シートには成功・失敗を「×」で書き記すが、自身で記入しやすしように薄いガイドを入れました。

## DODGEBEE チャレンジサーキット

得点シート

| 第1ラウンド          | ドッジビー・ディスガッター | ドッジビー・キャッチ  | ドッジビー・ドッジ   | ドッジビー・パス    | トータルポイント |
|-----------------|---------------|-------------|-------------|-------------|----------|
| 1               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 2               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 3               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 4               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| <b>第2ラウンド</b>   |               |             |             |             |          |
| 1               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 2               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 3               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 4               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| <b>第3ラウンド</b>   |               |             |             |             |          |
| 1               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 2               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 3               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 4               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| <b>第4ラウンド</b>   |               |             |             |             |          |
| 1               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 2               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 3               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| 4               | 1st 2nd 3rd   | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 1st 2nd 3rd | 12       |
| <b>トータルポイント</b> |               |             |             |             |          |
| 年 月 日           |               |             |             |             |          |
| 会場              |               |             |             |             |          |
| 名前              |               |             |             |             |          |

Dodgebee  
Toughest  
Session

●イラストについて

- 各プログラムの内容、動作をひと目で理解できるように表現し、その際、人物をピクトグラムにすることで、より動きや競技内容がわかりやすくなるように工夫しました。
- 人物のイラストはできるだけシンプルにしていきますが、必要に応じて手足に細かい動きを加えました。
- 競技を視覚するスタジアムや背景は色の濃度を低くし、競技者自身と区別しました。

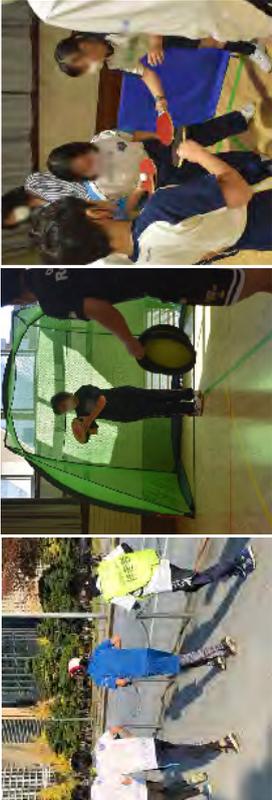
●文字について

- 文字はモリサワのUDフォントを使用し、太さ、大きさ、行間などを工夫し、見やすいバランスとなるように配慮しました。また、漢字にはルビを付けました。
- 文章の内容はイラストの補足をするためのものとして可能な限り簡潔化に努めました。

●色について

- 「チャレンジサーキット」の4つの競技は、競技内容の明確な区別のためにそれぞれ別のベースカラーにしました。
- ベースカラーは鮮しみややさしさ、幅やかさを感じられるような色を採用し、かつ可能な限り色覚障がいのある人にも区別が付きやすいような配慮をしました。
- 人物・ドッチビーには白い輪郭線を入れて、背景と区別しやすくしました。
- ※本テキストでは、モノクロのものを掲載しています。





## 筑波大塚子チャレンジスポーツプロジェクトの取り組み

国立大学法人筑波大学（筑波大学附属大塚特別支援学校）  
 照会先：筑波大学企画推進課大学連携・外部資金担当（宇留野）  
 fk.kyoren@un.tsukuba.ac.jp



## 大塚ランニングサークル

- ・知的障害特別支援学校の多くで取り組まれている。
- ・場所・時間・道具の制限が少なく、比較的気軽に取り組める。
- ・継続して取り組むことで、体力や健康の増進に大いに効果が期待できる。

|                  | 9月<br>(7) | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 |
|------------------|-----------|-----|-----|-----|----|----|
| 参加者              | 4         | 16  | 23  | 20  |    |    |
| 水子<br>保護者<br>指導者 | 8         | 23  | 36  | 23  |    |    |



## 活動の概要



表1 今年度の登録者（重複あり）

| クラス       | 本人<br>きょうだい<br>卒業生 | 保護者<br>ボランティア |
|-----------|--------------------|---------------|
| プロジェクト全体  | 43                 | 47            |
| ランニングサークル | 24                 | 33            |
| 卓球クラブ     | 22                 | 9             |
| トッチボールクラブ | 26                 | 21            |

- ・学校を拠点とした3つのクラブ活動の実施
- ・生活に入スポーツ活動を定着させ、余暇の満足度を高める。
- ・知的障害のある方々へスポーツ指導をする際の簡易マニュアル作成の試行（必要な情報収集）

## 大塚卓球クラブ

- ・オリンピック・パラリンピックの正式種目であることから知名度が高い。
- ・卓球ルール、ごる卓球、卓球というように参加者の人数や運動能力・技術に応じてルールや道具を工夫しやすい色々な楽しみ方ができる競技である。

|           | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 |
|-----------|----|-----|-----|-----|----|----|
| 参加者       | 17 | 21  | 22  | 22  | 14 | 14 |
| 水子<br>保護者 | 13 | 21  | 20  | 23  | 6  | 8  |



## 大塚ドッチビークラブ

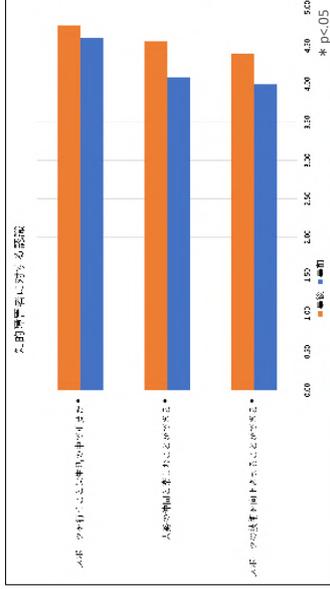
・怪我が少ない一方で、短時間で運動量を確保できる種目である。

・全国障害者スポーツ大会の正式種目であるフライングディスクへ、発展的に取り組める。

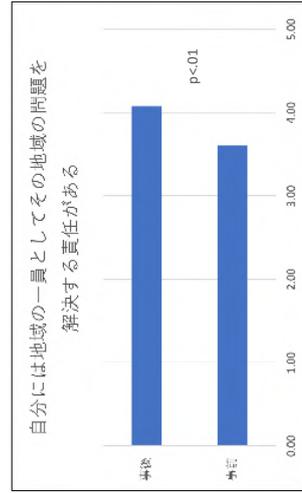
|     | 9月  | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月  |
|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|
| 参加者 | 2.0 | 2.3 | 2.0 | 1.5 |    | 1.3 |
| ボラ  | 2.7 | 3.0 | 2.7 | 2.3 |    | 1.1 |



## アンケート分析の結果抜粋（保護者、ボラ）



## アンケート分析の結果抜粋（保護者、ボラ）



## まとめ（次年度への展望）

- ・近隣大学のボランティアセンターへ連絡・依頼
- コロナ禍で活動や派遣の制限があり、ボラ派遣実現に至らず。対策が必要。
- ・障害者スポーツ指導者協会HPに事業についてリンクを依頼
- 指導員の有資格者が1名登録。他のボラへ現場で指導をして下さった。
- ・交流経験のある卒業生、附属学校生徒が定期的に参加
- 在学中の交流経験が理由 / 在學生は本事業の経験が進路変更へつながる。
- ・社協ボランティアセンターへ連絡・依頼により、区内高校生徒9名のボラ参加実現(12月卓球)
- 高校のボラ活動担当者と、次年度以降の定期的な活動場所を検討。
- ・コロナ禍でも活動を継続する方法として、オンラインスポーツ教室の実施。
- 制限のある状況下でも、プロジェクトへの期待の高さに答える活動の試行。

令和2年度 スポーツ庁委託事業  
Special プロジェクト 2020  
「特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業」

筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト報告集

スーパーバイザー（帝京大学教育学部初等教育学科）

中村 晋

コーディネーター（立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科博士課程後期課程）

中村 真博

筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト事務局

川間 健之介 大宮 弘恵 石飛 了一

筑波大学附属大塚特別支援学校 PTA

新見 顕子 松本 有子

大塚特別支援学校ドッチビークラブ後援会

森下 博子 都築 真裕美

一般社団法人日本ドッチビー協会

稲垣 敬雄 小島 淳一 中村 真博

るのスポーツ

青木 龍太 青木 智美

寄稿

（立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科博士課程後期課程）

中村 真博

---

令和3年3月10日 印刷

令和3年3月20日 発行

発行者 国立大学法人筑波大学（筑波大学附属大塚特別支援学校）

本書の無断コピーは、著作権・肖像権にふれますので、ご注意願います。

Copyright© School for the Mentally Challenged at Otsuka , University of Tsukuba.

---

